
ハーフエルフの憂鬱

SMILE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーフエルフの憂鬱

【NZコード】

N5121X

【作者名】

SMILE

【あらすじ】

ハーフエルフの女の子と取り巻く家族のお話です。

その1

エルフと人間の間に生まれた者はハーフエルフと呼ばれる。

人間にもなれず、エルフにもなれない半端者。

それが私。ラルーエスエル

私の母親がエルフで父親が人間だった。

私の耳は、父の耳より長く母の耳より短い。

母は、とても美しい人でよく笑う自慢の母であり、父はとても優しく、なかなかの男前でちょっと浮気性で、だらし無い所もあった。

酒場でお姉さんを口説く姿を見つかると、母が微笑みながらキレてフルボッコにされていた。

が、次の日、ボコボコの顔をしながら「僕の愛しのエルザー大好きだよ」

「ふふふ、私も!ディーン!」と朝から、子供達の前で堂々とイチヤつく。

父様：右手折れますよね。というツッコミは入れずに子供達はもくもくと朝食を吃るのが日常だった。

そんな父と母が大好きだったが、ハーフエルフはエルフと同じ成長速度が遅く、身体的な成長の速度が人間の5倍かかる為、見た目が

人間の10才くらいの子供に見えた頃、父は亡くなつた。

母は悲しみ嘆き、一週間泣きつづけた。

父様が死んで、一週間目の朝
突然、母の泣き声が止んだ。

「階！ついでらつしゃい」

母様は、さつきまでの意氣消沈していた様子は微塵もなく、荷物を手早くまとめていた。

「か、母様何してるの？」

兄のクラスが恐る恐る聞くと、母は例のニッコリ笑顔だった。母様は、いつも笑っているが、ニッコリ満面の笑顔は、非常に怒つているなどの不吉な前兆だ！

子供達、一瞬で凍りつく。

ヒイイイイイ……例のその笑顔は怖過ぎます！

「ディーンがいなければこの地には用がないわ。

というか思い出がありすぎて、母様泣き続けちゃう！

母様の安らかな笑顔とあなた達のためにこの家を売払つて、実家に帰る事にしたのよ！」

えつ！まだ父様が死んで一週間なのに、なんて切替の速さーむしろ世間的にまだ泣き続けるべきでは？

そんな我々兄弟の気持ちを知つてか知らずか母は、エルフの国へと私達を連れて帰つた。

エルフの国のパチーノ

初めて足を踏み入れたエルフの世界。町は、白と青色で統一されており、道は魔法で青く光っている。

更に、行き交う人は皆さん美男子＆美女ぞろい。

地味な顔の（対エルフ比：言い訳ではありませんが、もとの町ではかわいいと評判の兄弟でした。エルフがおかしいのー）我々兄弟は注目の的だった。

ああお家に帰りたい！けどもう家もないし！

母はの実家は、エルフの国の中で貴族の地位にある家だった。

「お父様！お母様！かわいいエルザがかわいい孫達を連れて今帰りました～」

母様そのテンションの高さどうにかなりませんか？

ここで話は逸れますが私と兄弟達を紹介します。

長男クラス。年齢50才（見た目10才）

母様に似た顔立ちで金髪碧眼の美丈夫。
ちなみに私達は三つ子です。

同じ年でもクラスは、長男の自覚を持ちすぎる程持つてあり、（父母があんなんだったので、自分達だけでもしっかりしなきやという

長男体質）

綺麗な顔に似合わず趣味が家事と弟妹達の育児。

口癖は、「まったくもう」

頼りになる兄様です。

長女私、ラルー

三つ子の真ん中。私は、父の母つまりおばーさまに似てしまい、髪の毛は鮮やかなチェリーブロンド。つまり赤毛。目の色は、これまた母様方のおばーさまに似た紫色。

悲しい事に顔立ちは、美女ではなく普通の顔だが、珍しい赤毛と紫の目は、人目を引いてしまい、正直コンプレックス。私は赤毛の人の気持ちが痛いほどわかる！

次男フィーダ。

三つ子の1番下。

髪はダークブロンドで目は黒

三つ子の中で1番最後に生まれたせいもあるかもしれないが、甘えん坊。どんな人でも上手く相手にできる天性のタラシです。しかも、上目遣いがもう父性＆母性本能くすぐりまくりでフィーダのお願いを突つ張る事がでた人を私は知らない。

次女ライン40才（見た目8才）

金髪で茶色の目でこれまた母様に似た美人だが泣き虫＆超ビビリ。寝る時は私と一緒にベッドに入つて手を握つていなければ怖くて寝れない。

年の離れた末っ子カル3才。父様が70才の年に生まれた（元気なエロじじいな父様：）

まだほんの赤ちゃんだから皆のアイドル。茶色のくるくる巻き毛と縁の目が父様そっくり！

総勢五人の子供を連れて元気に実家の門を叩く母様！
母は強し！

扉が開くと黒髪に紫色の目をした今まで見たことが無いくらい飛び

切り綺麗な女人の人が出てきた。

「エルザ？本当にエルザなの？顔をよく見せてちょうだい。」

「お母様、娘の顔忘れたの？いやだわボケちゃって！ただいま帰りました。」

「お母様、今この美人を「お母様」って！どうみても母様とあまり年が変わらない人だと思いますがつまり、我々のおばーさま！？」

「あなたが、自分を探してきます。と訳のわからない書き置きを残して家出してどのくらい経つたと思ってるのー散々探したのに見つからないし、何を考えて……」

おばーさまがお小言を言いながらふつと田線を二つに向けた固まつた。

「エルザ！？この子供達は何！

まさか人間との間に、こ、子供を作ったの！？」

「だから、孫連れて帰ってきたって言つたでしょ！」

それに、たまたま愛した人が人間だったのよ。結婚して子供を作つて何が悪いの？私の宝物だし、彼の大事な忘れ形見よ！」

「そんな、人間なんかと、けつけつけつ結婚ですって！」

「そう。結婚して55年経つたわ。でも、一週間前に彼は亡くなつた。」

だから子供達を連れてこっちに戻つたの。魔力が安定してないから、人間の世界にいたらご近所に迷惑がかかるしね。ここなら使いたい

放題じゃない！

お父様とお母様は孫に会えるしどうしても良い話でしょ

例の二ツ「コリ微笑む母様の顔を見たおばーさんは、口を開きかけたが何も言えず、最後には「ついていらっしゃい。」と一言いい、私達は、今まで住んでいた家の三軒分が余裕で入る大きさの一室に通された。

その部屋は、白で統一されており、白い大理石の床と柱に白い壁。大きな窓には白いビロードのカーテンがかけられ、同じく大理石でできた大きなテーブルに白い椅子が並べられていた。

「客間でなく、会議室に通すとは、お母様も人が悪いわね…」

母様は不機嫌そう椅子に座ると膝を組み決して褒められるようたたずまいではない格好でに言い放つ。

「か、母様。私達出戻りだからやつぱり世間的にも色々とあるんだと思うよ」

私は恐る恐る言つた。

「何言つてるのよ。私達は血が繋がってる、れつきとした家族なのが一世間体より家族でしょうが！」

はい、そうです。家族です。しかし、50年程家出されてましたよねつとツツ「コミたいのを堪える。

「ねえ、母様。お祖母様の言葉を聞いて思つたんだけど、人間つて、エルフの中では蔑まれる存在なの？」

クラスが聞く。

「あ、それ俺も思った。だつて俺の笑顔が通用しないんだもん！びっくりしたよ」

「斐ーダあんたは、黙りなさい。

「おばあ様、僕達の事嫌いなの？」ラインがおずおずと聞くと、

「何言つてんの！」と豊満な胸に私達を力いっぱい抱きしめた。

「あんた達みたいな賢くて可愛い子達が嫌われる訳ないじゃない。

ただ、エルフってちょっと固くて自分達以外の種族を受け入れられないのよね。

本当頭固いわよ！何様なの？全くもう。

でも大丈夫！私達は家族だし、母様も側にいるからどんな事でも太刀打ち出来るわよ！」

母様それは、大丈夫と言わない。

一抹の不安をよそにお母様は、例の笑顔を見せた。

か、か、母様！ケンカだけはやめてね！お願いします。

突然、会議室の扉が開くと金髪碧眼の絵に描いたような王子様みたいな男の人が入つて來た。

「エルザ。久しぶりだな」

「お父様、お久しぶりです。お母様からは、詳細はお聞きになつて

ますよね？私達の事。」「

…まじですか。おじーさまですか。この方が…

「ああ、聞いた。50年もの間音信不通だつた上に、よりによつて、人間なんかと子供を作りつたお前とハーフエルフの子供の世話をし
てほしいと。サルン家の恥さらしもいいとこだ。」

「恥さらしでも、なんでも事実は事実です。れつきとしたお父様の孫をハーフエルフという言葉でひとくくりにしないで！
私達には、お父様とお母様にすがるしかないです。

子供達は、本当にいい子達ばかりだわ。絶対にお父様も気に入るはずよ！」

「私は、ハーフエルフを見るのも鳥肌が立つがね。しかも、それを孫と認めるなど虫ずが走るわ！」

「う、う、う、ウエーハーン！ ウエーン！ ヒック、ヒック、エエ
エーンエエーハーン！ ビエエーン！」張り詰めた空氣にカルが泣き出
し、それに合わせてラインも泣き出した。

パーン！ ガシャーン

泣き声と共に会議室にあつた机や椅子が動き出し、窓ガラスが粉々に砕けていった。

クラスと私が必死にカルとクラスをあやすが泣き止まず、緊張して
いたクラスも「カル、泣き止んで…ヒック、な、なぎやんでえエ
エーン」と泣き出し、それを見ていた、フイーダまでも泣きはじ

めた。初めて自分に向けられる蔑みの眼差しと兄弟達の泣き声に今まで悲しくなり、とうとう我慢できずに泣き始め、泣き声の大合唱になつた。私達の泣き声と共に屋敷全体が揺れ、壁や床が壊れはじめ一層泣き声が大きくなつた。

「！」 こら泣き止みなさい！」

おじーさまが慌てて止めに入るが、一旦涙のスイッチが入つた私達は、やうやく止まらない。

「ピーン、ピーン…ギャーギャー…ウーンウーン

「！」のままじや屋敷が崩れるわね。お父様！私達の面倒を見てくださいるなら、止めるけど、どうする？」

平然とした顔で母様がおじーさまに聞いた。

「わかった！わかったから今すぐ泣き止ませなさい！」

「ありがとう！大好きよ」

ニッコリ微笑んだ母様は、私達の方を見ると「今から10数える間に泣き止まないと、承知しないわよ。10、9、8、7…」と笑顔で言い放つ。

例の笑顔を向けられ、条件反射でピタッと泣き声が止む。

パブロフの犬状態の私達。

ハーフエルフは、力が強いため、感情のコントロールができない内は、魔力が暴走し、色々なで事がおきてしまう。会議室は全壊していたが、なんとか屋敷は無事で済んだ。

おじーさまがよたつきながら、会議室を出ていくと、母様が

「あなた達よくやつたわ！本当にいい子達ー！これで、しばらへは安泰よ」と言つてまた私達を抱きしめた。

母様、泣いて頭がボーッとしますが、母様が喜んでるって事はグッジョブって事なんですかね？

その後、それぞれ各個人の部屋を割り当てられたが、今まで自分の部屋を持つた事がないのと、家族が離ればなれになる事の不安から、しばらくの間、私達6人が同じ部屋になるようお願いし新たな生活が始まった。

私達がパチーノに来てから、今までの生活とは、がらりと変わった。

朝、私達六人が寝ている大きなベッドに侍女三人が起こしに来てく
れ、それに身支度を整えてくれる。

服もいつも同じ服を着ていたのに、毎日違う服を用意される。

一度着た服は、どうなるんですか？まだ全然着れますよ！なんでも
つたいない事してるんですか！とツツコんでみたが何を言い出すの
この子は的中線で見られ、それからば、出されるものを静かに着て
いる。

その後、朝ごはんを食べる食堂に移動する。

食堂には、おじーさまとおばーさまと一緒に朝食を取るが、おじー
さまは、私達の事が好きではないので、全くの無視。

ところが、おばーさまはどうやら子供大好き気質のようで、最初は
ハーフエルフの孫に戸惑っていたが、時間が経つに連れ溺愛し、世
話を焼き始め、おばーさまが口を開かない時間はない。

「クラス！顔にパンがついてますよ！おばーさまが拭いてあげるわ
ね。

あら、カルは、お腹が空いてたのね、もうお皿が空だわ！早くおか
わりを持ってきてちょうだい。

ラルー、ニンジンが嫌いなのはわかるけど、今よりもっと美人にな
るから一口でもいいから食べなさいね。

またラインは、お口が動いてないわよ。違うものがいいなら作らせ

るから何が食べたいの？言ひて『らんない。え？お菓子？そうねえ、お皿にあるじ飯食べたらクラスの好きなケーキをあげますよ。ええ約束するわ！

フィーダ、肘をついてはダメよ。せつかくの男前が半減しちゃうわよ！そう、姿勢を正しく美しい所作をしていれば、あなたは素敵な紳士に見えるわ！

おばーおまは、本当にうれしそうに私達の世話を焼いてくれるので今では監おばーおまから引ついて離れない。

母様は、その光景をしたり顔で見ている。

母様、計算ずくだつたんですね。つていうか、母様私達にしつけといつ事は、一切してませんよね。おかげでのびのび育ちましたが、今現在教養が全く見についていないから苦労しますよ……。テーブルマナーくらいは、早めに教えおいて！

その後は、年齢別に別れ家庭教師のもとでお勉強。

カルはまだ赤ちゃんなのでおばーおまと過ごしてこる。

その間、母様はおじーおまとは、一緒に伯爵家の難しいお仕事をしている。

今日は、楽器の練習だ。

クラスとフィーダは、飲み込みが早く先生が稀に見る逸材と褒めているが私ときたら全くできない。

違う意味で稀に見る逸材と先生に言われてしまった。

すっかりやる気を無くしてしまい、先生にお腹が痛いから自室に戻るといい、部屋を出た。

「ラルー大丈夫？」

「クラス！大丈夫よ。わざわざ追いかけてくれてありがとうございます。でも、本当に大丈夫！クラスは続きをして」

「ラルー…気にしなくていいよ。魔力だつたらラルーが僕らの中で一番なんだからね。音楽なんて、生きてく上では必要ないからさ」

そこまで気をまわされると余計落ち込むよクラス。

「違うの、本当に朝、」はん食べすぎたみたいでお腹痛いの。あ、でもおばーちゃんと母様には内緒にしてね。心配するから。」

「わかつてゐよ。ゆつくり休んで。」

優しい兄様だけど、その気配りが今は辛いわ。悔しいから一人でこつそり練習しようつと！

広い庭に出ると人がめつたに来ない東屋がある。（この前、皆で探検した時に見つけたの）

よし、ここで練習しよ！

私はこつそり隠し持つてきた横笛を出し練習を始めた。

フウーフウーフウピーフウー

いくらやっても音がでない…

出ても的外れな高音だけだし。何故だ！？
クラスもフィーダも始めからできたのに…

あたし、本当に才能ないかも…

いやいやいや、同じ兄弟なんだから私にだつてできるはず…！
気を取り直して、笛を持った。

フウーフウーフウーピーフウーフウーピーフウーフウーフウー^{ブブブ}

小1時間くらい練習したが、全く音がでない。

「何よこの笛！」

あまりの出来なさ加減にほとほと嫌気がせし、横笛を生で投げ出した。

「ブツ（笑）」

え？え？え？

誰もいなかつたよね…。今、誰か笑つた？

周りを見渡すと、私のすぐ後ろになんとおじーさまがいた。

「あ、あの…これは、その…」
やばい癪癩起こしたここまで見られてた？

「お前は、なんでこんな所で笛を練習している？兄弟達と一緒に

ないのか？」

「あ、えっと一緒にいたんですが、一人はすぐに出来てしまい、私がだけが…出来ないんです…」

ああただでさえおじーさまに嫌われてのに、更にまた笛が苦手の痼癖持ちという嫌われ要因が加算されてしまつ…

ああ私のバカこんなところで練習しようつとして…

「出来ないのが悔しくて一人で練習して、更に出来なくて痼癖を起こしたのか？」

「…はい」

「フツハハハ！」

え？お、おじーさま？何がそんなにツボなの？

キヨトン顔の私に散々笑いよつやく落ち着くと

「私の幼い時も同じ事をしたよ。更にエルザも全く同じ事をしてた。エルザの場合は、笛を粉々にしたけどなあ。

笛が苦手なのは我が家伝統らしいな。散歩の途中で今日は、懐かしいものを見れた。」

そつぱうと、おじーさまは屋敷の方へ戻つていつた。

その日の夜、皆が寝静まつた頃に、仕事を終えて寝る支度をした母様がベッドに入ってきた。

「お帰りなさい、母様」

「あら、ラルー起きていたの？」

「うふ、なんだか眠れなくて。」

「あらあら、睡眠はお肌にとつても必要なのみ。母様が隣に寝てあげるから、もう寝なさい。」

そう言つて母様は、私の背中をポンポンとゅっくり優しく叩いてくれた。

「うふ。……。

ねえ……母様も横笛が苦手だったのよね？」

「は？？え？横笛！？」

いきなり何の事。横笛？そりねえ昔、習つた覚えがあるけどなんでもまたそんな事いいだすの？」

「今日、おじーさまに聞いたの。

私が横笛が苦手だつていつたら、おじーさまも昔、苦手で母様も苦手だつたって。

しかも三人とも癪癪起こして、笛に当たつているから、横笛が出来ないんのは伝統なんだって。」

「お父様がそんな事話したの…驚いた。

まあ確かに、私、めちゃくちゃ苦手だったわ。いくら吹いても音が出ないもの。

ラルーも似ちやつたか（笑）

といひで、お父様にいつ会つたの？」

「んーっと、お脣前くらいかな？」

「……あんの狸じじいめ、少し散歩をするつてそのくらいの時間に執務室から出ていったのよね。

そしたら、帰つてきてからやたらと朗らかになつたなあと思つたら、そんな事があつたのね。

ラルーと会つた事なんて、私には一言も言わずに！

とこりで、ラルー！あの狸にイジメられなかつた？怖い思いしなかつた？

母様、今が1番怖いです！

「だ、大丈夫。そんな事なかつたわ！」

「そ、う。…なんにもなかつたのね。よかつた。」

母様はホッとした様子で私を抱き寄せた。

「…ねえ母様、言いくらいんだけど…、おじーをまつて私達の事嫌いなんだよね？」

初めて会つた時なんて、私達の事見るのも嫌そうにしてたのに、今日は、そんな感じではなかつたの。どうしたのかしら？」

「うーん…。私達の存在に慣れてきたつて事が1番かしらね。それに、ラルーの顔だちが、どことなく、幼い頃亡くなつたつた私の兄様に似てるからかもね。」

「母様にお兄様がいたんだ！でも、私の顔は地味だから父様似なんじやないの？母様や、おじーさま・おばーさま、みたいなエルフっぽい顔立ち（美形）ではないわよ。むしろ、顔立ちならクラスやフイーダの方がエルフ顔じやない？」

「あら、ディーンは地味顔なんかじやないわー！若い時はそれはもう美しい顔だつたんだから！」

母様：私の顔が地味つてさりげなく言つてませんか？

「お兄様は、お父様のお母様、つまりラルーからしたらお祖母様に似てエルフには珍しく地味な顔だちだつたのよね。しかもお兄様の瞳の色は、私のお母様に似て紫色だつたの。ラルーと同じでしょ？」

私が小さい頃お父様は、それは厳しくてね。もちろん、愛情があつての厳しさだつたから、そんなに辛くはなかつたけどね

でも、特に自分の後継ぎにするお兄様には、厳しくしてたわ。

私があんた達に厳しく言わるのは、そのせいかもね。ふふ」

いやいやいや…厳しいうか怖いですよ。微笑みの裏の恐ろしさつてやつですか？ある意味、十分に厳しいですよ

「ある日、お兄様はお友達と遊びに行って、帰りが遅くなってしまった。

そうしたら、お父様に「時間を守れない者は、ずっと外にいる」って叱られて、家から締め出されちゃったわ。

お母様がお父様に取りなつて、1時間後くらいに、なんとかお兄様を家に入れて、夕飯の残りを食べさせてあげたんだけど、お腹が空きすぎて、がつついたみたいで、食べ物を喉に詰まらせて…

その時、お母様も侍女に呼ばれて次の日、うちで開かれる事になつてた夜会の食べ物の献立を決めている最中だったから、誰も食堂にはいなくてね。見つけた時には手遅れだつたわ。」

おじ様……。つーか、話の流れからおじーさまとの確執か何かで亡くなつたと思ってたら食べ物を喉に詰まらせつて！

それよりなにより、いいとこのお家の子が、食べ物にがつつくつてどんだけハングリーだったのよ。

ツッコミたい事が山ほどありながら、ここはぐつと堪えた。

「お父様もお母様も歎き悲しんだけど、中でもお父様のの気の落ち込み様つたら尋常じやなかつたわ。

それからは、感情もあまり出さなくなつたわね。

それが、今日、あんなに朗らかになつた理由がラルーと会つたから
なんて凄いわよ！ラルー。グッジョブよ！

グッジョブって母様：

まあ、しかし、おじーさまとの距離が少しほぼ埋まつたつて事かなあ。
怖いけど、もつとお話したいなあ。

そう思いながらラルーは眠りに落ちた。

その後、特におじーさまから話しが掛けられる事はなく、いつもの日々を送った。

「今日は、パチーノの建国記念日で街中お祭りをやっているのよ。せっかくだから、皆で見に行きましょ！」

おばーさまの提案で、私達兄弟と母様とおばーさまでお祭り見物に出かける事にした。おじーさまは、お仕事だそうで不参加です。

そーいえば、黄、人間の街で暮らしてた時に謝肉祭かなにかのお祭りに一度行った事があるが、家族とはぐれてしまつたフィーダがエルフと間違えられて（エルフに会つた事のない人間は、エルフとハーフエルフの区別がつかないから私達の事をエルフだと思ってる人が多い…。まあハーフエルフも十分に珍しいけどね）人買いに誘拐されそうになつた。

暴れるフィーダを誘拐犯が失神させて、袋に詰めよつとしていたところを、父様に発見され、更に母様が誘拐犯達を半殺しにしたという凄い過去がある。

私達は、それ以来祭には行つていない。

久しぶりのお祭りだから、フィーダには、悪いがワクワクする！まあフィーダもトラウマにはなつていみたい。

さつきから「クラス！わた飴とホットワインは絶対外せないよな！」

ヒウキウキ顔。

「お前、はしゃぎ過ぎて、またさらわれんなよ」と冷たい目でクラスに突っ込まれていた。

しかし、フィーダはどこ吹く風。

「大丈夫だよ。俺、魔法使えるようになつたから逆にぶつ倒してやる!」

「[リ]はエルフの国だから、みんな魔法が使える事忘れてるだろ。今日は絶対にはぐれないようこじるよ。フィーダ。」

クラスが釘をさす。

「まあまあ、クラス。フィーダだつてよくわかつていますよ。

フィーダ。クラスはあなたの事を心配だからこいつついているのよ。きちんと気をつけるわよね?」

おばーさまが間に入つてとりなす。さすが、名バッファーだわ!

やつこひじりるうちに馬車が広場に着いた。

いつもは、青と白で統一されている街が、田にも鮮やかな色とりどりの飾りつけをされている。

所せましと出店がひしめき合つており、エルフだけでなく、ホビットやドアーフ、ピクシーなど様々な種族の人達が店を構え 見たこともないような物を売っていた。

「トロール山の地下鉱脈で取れたオリハルコンと金細工はいらんか
ね?」

「妖精の粉を振り掛けた凧は、どんどん上がるよ。」

「イエティが作つた、アイスクリームだよ！ レモン味、バニラ、ミント味、ベリー味、チョコレート味の中から選んでね」

「私達人魚の涙からできた一級品の真珠のネックレスはいかが?」

太陽の花の蜜で作ったガーディングより安くするわよ」

「魔女に伝わる若返り薬はいらないかい?」

色々な種族の出店がでていて、どれも目移りしてしまうラインナップだ。

いい匂いと綺麗な品物に驚いていると、パレードの紙吹雪が舞い散つてきた。すると舞い上がった色とりどりの紙吹雪同士がくつつき、紙の小鳥になると口口口と不思議な泣き声をあげながら、飛んで行った。

す、すゞーーー！ なにこれ……

遷する。しかも屋の食へ物は、全部おこなへ！
そしてキーめぢやへゆきや楽しむやうに。

私は、目を輝かせて聞いてみた

「クラス、フィーダ、ラインどれから見ようか？」

「そうだねえ。ラインは祭が初めてだよね？ どれが見たいかい」

「…私、よくわからないからクラス兄様、ラルー姉様が見たい物と一緒に見たいわ。」

「それじゃ、ラルーは何が見たい？」

クラスはレディーファースト精神の固まりだから、女性や子供の意見を必ず先に聞く。
本当に優しい兄様だ

「そうね、今日は暑いからイエティのアイスクリーム食べてみたいな。」

「いいね！俺もアイス食べたいと思つてたとこ！レモン味がいいな

フィーダも大賛成。

「それじゃ、さつき貰つたおこづかいをそれぞれに分けるね。」

そういうつてクラスが一人一人に硬貨を分けてくれた。

「母様達は、広場でお茶してるから、あなた達は好きな物見ていらっしゃい。大きくなつたからあなた達だけでも大丈夫でしょう。でも、フィーダは絶対にはぐれないようにな。言われなくてもすると思つけど、ラルーとクラスは、ラインの面倒を見てあげてね。」

母様のお許しが出たので私達四人（カルはまだ小さいからおばーさまと母様と一緒に）は、イエティの屋台へ向かった。

イエティの屋台は、全て氷で出来ていた。おそらく、氷系の魔法を使っているみたいで、気温は高いのに一切溶ける事はない。

「すいませーん。レモンアイス2つとバニラとチョコ1つずつ下さい！」 フィーダが元気に注文する。

「レモンアイス2つとバニラとチョコ1つずつね。」

重低音な声と共に、店の奥から真っ白な毛で覆われた人型のモフモフした巨体が現れた。

私達は一瞬固まつた。

なにこれ！イエティ（雪男）って本当にいるんだ…

推定、3メートルもある人間には、生まれてこの方出会った事がない我々は度肝を抜かれた。

「今日は、暑いからアイスクリームはきっとおいしいよ。ん！？匂いが似た匂いだから君達は兄妹だね。仲良くお食べよ。」

ガタイの割に非常に優しいイエティのおじさんは、コーン型の氷にアイスをたっぷり入れてくれた。

「氷のコーンは、手で触つても溶けないし、触つてもちょうどいい冷たさにしているから冷たくて持てなくなる事はないよ。味もソーダ味にしているから食べても美味しいよ！」

そういうて、一人一人に手渡してくれた。

レモン味のアイスは、一口食べると冷たさとレモンのすっぱさと程よい甘さで思わず

「おいしーー」と叫んでしまう程、超絶においしーー。

私達は、アイスを食べながら屋台を見て回る事にした。

「レモン味のアイス超うまいー！ライン、バーリラ味一口、俺にちょうだい！」

「いいよ

「いーひー、ファイーダー！お前の一口は大きいぞー。」

「いいのよ。クラス兄様、ラルー姉様も食べてみて。おいしいから

「じゃあライン私のレモン味も食べてみて。スッゴくおいしいよー。クラスもどうぞ！でもチョコ味も一口くれる？

「んんー！バーリラ味ー！クラス俺もチョコ味を一口ちょうだいー。」

「ファイーダ私が先だからー。」

「ラルー、ファイーダ喧嘩しないー！ラルーが先でファイーダは後だよー。」

貧乏暮らしが長かったので、回し食いが身についている私達でも、これも楽しいんだよね。

和氣あいあいとアイスを回し食いしていると声が聞こえた。

「うわあ何あれ？」

「貧乏くさい…。有り得ないな。気持ち悪い」

前方からの声に気がつきアイスから顔を上げると、そこには顔立ちが似ている男の子と女の子のエルフの子供が立っていた。おそらく兄妹だろう。

二人ともプラチナブロンドに縁の目をして年齢的に私達と同じくらいだ。

嫌な感じ！身なりがいいから、おそらく貴族だろう。金持ちって嫌な奴が多いわ。

人間の町にいた時もそうだった。しかし、ここで金持ち相手に喧嘩をするのは、得策ではない。ひとまず、聞こえない振りをするのが絶対にベター。

気づかない振りをして通り過ぎようとすると

「あいつら、半分人間の匂いがするから、きっとハーフエルフだよ。しかもあの女の髪見てみろよ。赤毛だぜ！気持ちわる！血みたいだ」
き、貴様ら、一番コンプレックスな髪の色を非難したか…。しかも
気持ち悪いと！
しかーし、ここは、が、我慢…。

「私、赤毛って初めて見るわ。本当に赤いのね。女の子なのにかわ
いそー（笑）」

堪忍袋の尾が切れた。

「私の髪の色が何か貴方達に迷惑かけた？」

「…」ニッコリ笑いながらバカ兄妹に近づく。

すると兄貴と思われる方が私を睨みつけ「ハーフエルフの分際で俺達に話し掛けるな！」

ほざけ、バカ男。言うに事欠いて、話し掛けるなど？！怒鳴りつけようとして口を開いた瞬間にニッコリ笑ったフイーダが割つて入ってきた。

「なあ、お前らがどのくらい偉いんだよ？人を髪や目の色や種族で判断するしか脳がないアホな奴らに俺の大切な姉貴の事を臭い口で批判しないでくれるかな？」

するとクラスは、更にフイーダとバカ兄貴の間に割つて入ってきた。

「赤は、綺麗な色なのに君達の目には血の色に見えるなんて、君達は、親から虐待でもされたのかい？かわいそうに。」

しかも、エルフの狭い世界しか知らないのに人間を蔑みハーフエルフを蔑む事で必死に自分の地位を確率しようとがいでているなんて…。かわいそうの一言につきるよ。これから先も必死で頑張つて蔑みながらの人生をまつとうしなければならないなんて…。なんて、かわいそうな人達なんだろう。頑張つてね」

クラス。毒舌過ぎ…昔からクラスは兄妹達がイジメられると心臓をえぐるような言葉を相手に突き付けていたが、ここに来てもまだその習性が抜けていないうだ。

「兄様、姉様、もう行きましょ。これ以上、次元の低い人達相手にすると時間がもつたないわ。バカは死ななきや治らないってこの前先生から教えて貰つたの。だから、この人達に費やしている私達

の時間が刻一刻と過ぎるのが本当にもったいないわ。」

笑顔でラインが私達を促す。

ライン…。あんたまでも…。

いずれにせよ我々は怒ると母様に似て笑顔でキレる。血はこわいわ

…。

我々兄妹の笑顔毒舌攻撃にビビッたエルフ兄妹は、コソコソと人込みの中へ消えて行つた。

ビバ兄妹プレー！

まあ、悲しいかな私達兄妹は、（カルはまだ片言しか話せないので別ですが…）母様に似ている部分があるんです。

血の氣が多いのは、きっと遺伝です。

バカ兄妹との一悶着が終わり、気を取り直して、再び屋台の探索に回つた。

人魚の屋台に立ち寄ると人魚が売つている真珠は驚く程大きくて綺麗だ。

ちなみに人魚さん達は大きな水槽が屋台の売り子側に用意してあって下半身は水に浸かりながら商売をしている。

すげえ…。屋台を開く前の準備が半端なく大変そうだ。

「こ」の髪留めラルーの綺麗な髪に似合つんじゃない？」

クラスが手に取つた髪留めは小さな真珠をあしらつたかわいい髪留めだ。

「あ、本当だかわいいー！買つちゃおうかな。値段も手頃だし

「いいよ。僕が買つてあげるよ。おばーさまから貰つてるおこづかいも持つてきるからプレゼントしてあげる。

ラインには、このペンダントはどうかな？似合つと思つよ。」

さすが、クラスーさつきのバカ兄妹に言われた髪の色を卑屈に思わないように、さりげなくプレゼントを買つてくれた。
なんて、よくできた兄だろ。

私は、素直に申し出を受けクラスに髪留めを付けてもらい、ライン

も小さな真珠のペンダントをフィーダに付けてもらつた

「よく、似合つよ。ラルー」

「さすがクラスの見立てだな！ラルーの髪に凄く映える髪留めだよ。よかつたなラルー。ラインもかわいいぜ。さすが俺の妹だ」

「「ありがとう」」私とラインは満面の笑顔でお礼を言つた。

それから、サラマンダーの火の曲芸を見たり、ホビットの屋台に行ってみたりと楽しい時間を過ごした。

そういうしていのうちに、竜のパレードが始まリずっと人混みが押し寄せてきた。

「きやあー！」

「ラルー、じつちー！」

クラスが手を伸ばし、私を引き寄せようとしてくれたが人が間に何人も押し寄せ届かない。

私も一生懸命手を伸ばしてもクラスの手がどんどん遠くなり、遂に一人になってしまった。

「ど、どうじよ、ひ…

人が多くて兄妹達の姿すら見えない。というか人の多さに増え押し出されてしまい、一体ここが何処なのかもわからない。

「クラス！ フィーダ！ ライン！」

大声を上げても、群衆に搔き消されしまい、全く届かない。

„

卷之三

母様、おばーさま、クラス、フィーダ、ライン、カル！会いたいよ

心細さでいつぱいになり、涙で視界がぼやける。

して泣いては何にもならない。とにかく話を探す

キヨロキヨロと周囲を見渡しながら場所を移動していくが全く見当たらない。

更に、小1時間くらい探し足がクタクタになつたが、クラス達の姿を見つけられない。

足が痛い……。ちょっとだけあの木陰で休んで、また探そう。
そう思つて、大きな木の下に行き座つた。

「みんな、どこに行っちゃったんだか…」俯あながち独り言をつぶやいてしまった。

私、相当まいつてるわ…

「ねえ、君さつきから同じ所をグルグル回つてるけど迷子かな？」

いきなり声をかけられ上を向くと、人懐っこい顔をしたエルフの青年が立っていた。

年の頃は、私より少し年上かな？人間の年で言えば13、4才くらいの黒髪、青い眼だけど、エルフにはめずらしく、眼鏡をかけていた。

「いえ、休んでいただけですから大丈夫です。」心配なく。

さつきのバカ兄妹の例がある。ハーフエルフは純血エルフから蔑まれる傾向が高い。

（おじーさまも初めて会った時はそうだったし）

警戒するに越した事はない。

「そんなに警戒しないでよ。しばらく君を見てたけど、ずっと誰かを探してゐみたいにキヨロキヨロしてたじやない？家族とはぐれちゃつたの？」

彼は私の前にしゃがんで目線を合わすと、警戒心を吹き飛ばすよくな優しい笑顔を向けてた。

この人いい人かも？

いやいやいや…人さらいは、笑顔で近づいて言葉巧に相手の警戒心を解いて誘拐するつて、フイーダの事件があつた後、母様と父様が熱弁してたわ。

ダメー！こんな言葉に流れちゃー信じられるのは家族だけ！

「本当に休んでいるだけですから。家族とは待ち合わせをしているだけです。あら、時間だわ！では、私はこれで…」

笑顔でそう告げると足早に立ち去つた。

いやあー危なかつた。しかしあいつのせいであんまり休めなかつたなあ。

いや、今はクラス達を探すのが先決！頑張れ私！痛む足にムチを打ち、さらに兄妹を探した。

が…………やつぱり見つからない。日も陰つてきている。母様達も心配してるかな？つていうか絶対に母様に怒られる…そつちの方が心配になつてきた…

「ねえ、やつぱり君、迷子でしょ！」

いきなり肩を捕まれ振り向くと、さつきの黒髪青年が心配そうな顔をして立つていた。

「つ、つけてたの？」

怖い、何この執念深さ！まさかのストーカー？

いや、私の顔ではストーカーはないか。

「普ふ！（笑）

つけてるなんて、人聞きが悪いな。家族と待ち合わせなんていうから、迷子だつて確信しただけ。

顔色が悪いね。疲れただろ？

さつきね、天界人の屋台で空味の飴玉買つたんだ。食べる？
すんごく、おいしいよ。」

青年は雲のような生地でできている、布を取り出し、包み開いた。

すると中から、色とりどりの飴があり、それをこちらに差し出した。見た事のない綺麗な色の飴で凄くおいしそう。そう言えば、お腹空いたわ。でも知らない人から物を貰うのってちょっと…

「 餅を貰うか貰わないか躊躇していると、彼は、包んでいた布の中から一つ餅をつまんで口に入れた。」

「うん、つまりー甘酸っぱくてうまいよー。夕日の味だね」

「え！ 夕日味！？」

夕日味つてどんな味なの?
今、どの色の飴食べた?」

「ジのオレンジと黄色のグラデーションになつたヤツだよ」

青年は飴を再びつまむと私の口に入れた。

ん！
！
！
！
！

おいしーーー！凄くおいしい！疲れが吹つ飛んじやう！」

あまりのおこしゃれしへなつ、――「おじぎ」へ青年と微笑んでいた。

はつ！－いかん。お腹空いてたのと、疲れと好奇心で頭回つてなかつた。私つてば、何知らない人から、飴貰つて懷いてるの！バカバカ。

「ハハハ！君はクルクルと表情が変わる子だね（笑）別に僕は人さ
らいでも犯罪者でもないから安心して。」

「本当に？」

「家族の名誉にかけて誓つよ。それでも信じられないなら、命をかけてもいい。」

「…わかった。あなたを信用する。私はおっしゃる通り、兄妹とはぐれて今、迷子なの。一緒に兄弟達探してくれる？」

「やつと信用してくれた！」

信じてくれて、ありがとう。

かわいい女の子の頼みとならば断れないな。顔色も少し良くなってきた！

今まで心細かつたんだね。もう大丈夫だよ。」

彼は笑いながら私の頭を優しく撫でてくれた。

この人、本当にいい人なのかも…

「さて、では早速、君の兄妹達の身体的な特徴を教えてくれるかな？」

「身体的な特徴！？」

ええっと、兄のクラスは、金髪碧眼。弟のフィーダは、ダークブロンドで目は黒。

私とクラスとフィーダは、三つ子だから背丈は私と同じくらい。妹のラインは、肩までの長さの金髪で茶色の目。背丈は私の鼻くらいかな。」

身振り手振りで特徴を伝えると青年は「ココ」と笑った。

「よく、わかった。ちょっと待つてなよ。」

青年はピィーと口笛を吹いた。

すると、一羽の鷹が空から飛んできて、青年の肩に止まった。

「*****」

よくわからぬ言葉で鷹に話しかけていた。何なの一休この人？！

すると鷹はコクリと頷き、再び空に飛んで行った。

一部始終を見続けていた私はポカンと口が開きっぱなしだったよう

で振り返った青年が私の顔を見て笑った。

「アハハ！凄いマヌケ顔してる。さて、これでじばらくすれば兄妹に会えるから暇つぶしに屋台でも見よっか？」

狐につままれたような気持ちを抑えて青年に促され屋台を見て回った。

「あ、あそこにおいしい、雲の綿飴が売ってる！凄くおいしいから駆走するよ。買つくるからちょっと待つてくれる？すぐに戻るから動かないでね」

そう言つと青年は、足早に綿飴を買いに走つて行つた。

本当にいい人だわ。そう思いながら青年と綿飴が来るのを待つていると背後から甲高い声がした。

「貴方達に乱暴をはたらいた者は、この赤毛なの？」

なんなの今日は！？

人の事を赤毛赤毛と呼ぶなんて。厄日か？

ギロつと睨みながら振り向くと、さつきのバカ兄妹とその親類と思われるプラチナブロンドの女の人がいた。

なんで会いたい家族には会えず一度とお目にかかりたくないバカ兄妹に会うんだろう。きっと私の今日の運勢は最悪なんだ…

「さうよ母様、このハーフエルフが私達を馬鹿にしたのよー」

バカ妹が意地悪そうな顔をして隣に立つて居る女に顔を向けた。つてことは、この甲高い声の人はバカ兄妹の母親か。道理で意地悪そうな顔してるわ

「おい、お前の汚らしいハーフエルフの兄妹は、見当たらないな？もしかしてお前、一人なのか？さては、貧乏過ぎて捨てられたのか？ハハツヤまあみろ！」

全くうざらさないの家族：

「スタンリー、およしなさい。ハーフエルフなんかに口をきくのは、貴方の価値が下がつてしまつわ！」

なんのよーこのクソ親子。いちいちムカついて言い方ができるとは、凄い才能だわ。

まあ、私も今日は言われっぱなしで我慢できる程、心の許容量超えてますので、あえて言わせていただきます。

「なんなんですか？いやもん付けてきたのは、そっちでしょ。これ以上、私に付きまとわないでくれますか？うつとおしいにも程があるわ。」

お馴染みのニツコリ笑顔で返す。

「まあ、なんて下品な口の聞き方をするんだじょう。私達を辱めた愚かさを教えてあげようとしているのに。あら？貴方の汚れた髪には似合わない髪留めなんてつけて。どうぞ盗んだの？」

バカ妹がほざいた。マジで蹴り倒してやるうか！」いつ…

そつ思つていると、バカ兄貴の方が乱暴に私の髪から髪留めををむしり取つた。絶対髪の毛が何本も抜けた！

「痛！－！何するのこのクソ男、髪留め返して！」

思わずグーでバカ兄貴を殴るとそれがクリーンヒットした。

金持ちは、いじめる事はあってもケンカも何もした事がないヤツが多いから避け方も知らない。

伊達に兄弟喧嘩で鍛えてはい私の腕つ節は、並の男の子より強い！

バカ兄貴は、私に殴られ屁餅をついた。やまーみろ！

ふつと不敵な笑みでバカ兄貴を見下ろしていると突然、強い衝撃を受け後ろに体ごと吹っ飛ばされ、背中から地面に叩き付けられた。

「クハツ…」

地面に背中をしこたま叩きつけた衝撃で少しの間息ができない。

「…－！」

いかん…！

こんなところで倒れっぱなしだと何されるかわからんない！

なんとか上体を起こして前方を見るとバカ母が私を魔法で吹き飛ばした事がわかつた。

「ハーフエルフごときが私の大事スタンリードに何をするの－この愚か者！殺してやるわ」
凄い剣幕でバカ母が怒鳴る。

子供の喧嘩に親がしゃしゃり出るか普通！つーか、肩が物凄い痛い
！何これ！

今まで体験した痛さを遥かに超える激痛がして痛みでクラクラする。しかも叩き付けられた衝撃で口の中を切つており只今、口の中は絶賛鉄の味中で気持ち悪い。

そんな鉄の味を気にならなくなる程、尋常でなく右肩が痛い！…どうしたのかと思い腕を見下ろすと、あらぬ方向に右腕が曲がっていた。えええ！…う、腕が折れる…。しかもバカ母、私を殺すつてなんて物騒なの？ 本當今日は厄日つて言うか命日になるの？

更にバカ母は、バカ兄貴がむしり取った髪留めを踏み付けて木つ端みじんしてくれた。

殺す…。マジぶつ殺す…。

人の右腕折つといて、その上、クラスが私の為に買つてくれた大事な髪留めをよくも…。このクソ親子め。お前らに殺される前に殺してやる！

ゆつくり立ち上がり口の中の血を「ペッ」と地面に吐き捨て口を拭う。このクソ親子、下町上がりを舐めんなよ…ぶつ殺す！
悪意を込めた念を貯めて親子にぶつけてやろうと集中した時

「お待たせ〜！つてあれどうしたの？ええ！…口から血が出てるよ。大丈夫？髪はボサボサだし、服に土がついてるし、何かあったの？本当にどうしたの？」

いきなり臨戦体制から引き戻され、かいがいしく世話を焼いてくれる青年が現れた。

青年は、私の服に着いた土を払おうとして、服をパンパンと優しくはたく。叩く手が右肩に触れた瞬間

「ギヤー！……いつたーーー！」私は悶絶しながら腕を底つてしゃがみ込む。

頭が痛くなるくらいの痛さと熱さで意識がボーッとする。

さつきまも痛かつたけど、怒りでアドレナリンが出てたらしく、応戦しようと思えるくらい痛みを我慢できてたけど、頼れる人が現れた途端、体は正直で痛みを全面的に感じるようになった。その上、折れた腕を軽く叩かれたら、そりゃ悶絶物ですよ。

「えーー腕が…折れてる…。ちょっと見せてみてー！」

青年は私の腕を見ようとすると、悶絶中の今は体を少しでも動かさうとするだけで脳天に響く程痛いので、ただ首を横に振り「今は無理」とジエスチャーで伝えるのが精一杯だ。

「誰にやられた?」

青年は一瞬驚いた顔を見せたが直ぐさま真剣な顔をして私を抱き寄せた。

「流石、人間の汚れた血が入っているハーフエルフの娘だわ。男をそそのかして自分の庇護を得るなんて。幼いのに娼婦の振る舞いが板についているのね。いいわ、その男共々消し去つてあげる。」

バカ母が罵声を浴びせる。

この人を人とは思わない言動。怒りと肩の痛さでクラクラするが、言い返す気力もなく、痛みが和らぐのを待とうとして、体を青年に預けたまま、目をギュッと閉じる。

「貴方達がこの子を傷つけ、あげく腕を折ったんですか？」

青年は私を抱き起こしながらバカ親子に厳しい目を向けた。

「この野蛮で薄汚いハーフエルフが息子を殴ったのよ！ハーフエルフの分際でエルフの貴族に手を擧げるとは、死に値する行為だわ。だから然るべき処置をさせてもらうだけよ」

すると青年はため息をつきながら言った。

「子供の喧嘩に親が出てきて、あまつさえ、殺そうとするなんて、とんだ貴族もいるもんだ。恥を知りなさい。」

低く冷たい青年の声が響く。

「ハーフエルフに騙される愚かな男が私に説教とは…。愚か者同士仲良く死になさい！」

そう言つと、キレたバカ母は、呪文を素早く唱え手の平の中に光りの玉を作ると、それをこちらに投げつけた。

ドローンといふ地の底を搖るがすよんな音と共に空氣がビリビリと搖れる。

すると一気に上から何十倍もの重力が私達に襲い掛かり、圧死させようとする。

「キャアー」

思わず叫んだ次の瞬間、ふつと体が軽くなる。ゆっくり目を開けると、私達の周りの地面は数十メートルに渡り陥没しているが、我々は温かな光りの中にいて何ともない。

幸い、巻き込まれた人もなく、立ち並ぶ屋台にも影響が無かつたのでケガ人もいないが、さすがにここまでハイクラス魔法を道端で使つてしまつと注目の的になるが、皆バカ母が恐ろしく遠巻きで見ている。

「馬鹿な……私の最大級の呪文が止められるなんて……」

バカ母はおそらく彼女が持つていてる魔力を総動員して、私達を殺すための呪文を使つたらしく、力を使い果たしてしまい、立つていられず地面に膝をついた。

「「母様！」」

バカ兄妹が母親に駆け寄る。

バカ母は、驚きと力を使い果たした事で顔色は相当悪い。

（顔色の悪さでは、バカ母に腕を折られた私の方が確実に悪いと思うけど……）

「先程の呪文が貴方の使える最大級の呪文とは……弱すぎてかける言葉もありませんよ。」

青年が悲しい表情でバカ親子を見下す。

何この人、さつきまでの柔らかキャラとは全然違う…。
なんかちょっと、怖い…。

「貴方が先程、私達を殺そうとした魔法の威力は……こんなもので
すかね？」

青年は手の平にバカ母が作った光の玉を出した。見ると明らかにバ
カ母が投げて寄越した、2倍くらいの大きさだ。

「じゃあ、お返しです。受け取つて下さい。」

青年は、光りの玉をバカ親子に投げつけた。

「「「きやああああ」」

バカ親子の断末魔が響く。

一瞬にして目が開けていられない激しい光が周りを包み、バカ親子
の姿は光で見えず、その周囲は、激しい光のせいで逆に闇に包まれ
た感覚を覚えてしまう。

青一年ーーー優しい顔して親子共々消し去ったの！
いや、そりやバカ親子だけど殺してしまつて…
あまりの事に私はワナワナと体が震えた。

「ちょっと…」口を開いた私は青年から離れた。
「殺す事ないじゃない！この人でなし。」

私が怒鳴ると青年はゆっくりバカ親子達がいた場所を指をさした。
何のことかわからずその方向を見ると

眩しさにボー然としている親子がそこにいた。

「人を殺そうとする時は、自分が殺されるかも知れない事を覚悟するものだよ。」青年は、平然とした顔で言った。

な、なんなんですか？この人は……。

「あっ……ラルー……！」

母様、おばーさまー・ラルー発見！ラルー発見！」

今まで緊迫した空氣を全く無視した、素つ頓狂なフイーダの大声と共に、母様とおばーさまとフイーダが人影から現れた。

「ラルー・ラルー！もう、どこにいったの！心配して死ぬかと思つたでしょ……！」

泣きそうな顔の母様が猛烈な勢いで走つて來た。私に会う事に夢中で周りに目が行つて無かつたらしく、ボー然としているバカ母を踏み付けて、私のもとまで走り、思い切り抱きしめられた。

「ギャー……！」

腕が折れている事を知らない母様が力いっぱい抱きしめたので激痛が走り思わず白目になる。

「え！？な、何？何？何？どうしたの？」

か、母様、お願い……離して……

あまりの痛さで口をパクパクさせていると、

「あのう、お嬢さん右肩が折れているので離してあげた方がいいと思ひます。」

青年は母様と私の激しい再開の姿に驚き戸惑いながらも、痛みのため口が聞けない私に代わつて母様に忠告してくれた。

「は？？？え？？？ラルーの腕が折れてる？…………うそ！」

そう言つて私を離して肩の様子を見る母様。

母様。母様に抱きつかれてから離されるまでの間に私、死んだ父様が綺麗なお花畠の中で元気に手を振ってる映像が見えた気がする…

「……本當だ。折れてる。」

「誰にやられたの？」

もの凄くニッコリ笑顔で母様が私に聞く。

か、母様。その前にお願い！！私に治療をしてえええ！！

おばーさま……。いつも冷静沈着なおばーさまだつたらまづ最初に治癒魔法をかけてくれると思ってました。

しかし、ます報復とは……。せこはり母様の母様たれ、根っこは同じ血が確実に流れている。

「ちょっとあんた！ウチの姉貴に何したんだよ！」

フィーダが敵意剥き出しで青年に迫る。

「フイーダ！違うの。この人は迷子になつた私にフイーダ達を探す事を手伝つてくれたり、バカ親子から守つてくれたのよ」

私は事の顛末を母様達にざつと話した。途中何度も母様とおばーさまとフイーダがバカ親子をしばこいつとしたがその度に私と青年が止めた。

これ以上、危害を加えれば本当にバカ親子は、冥土送り決定だ！言動には凄くムカつくが、殺すなんて、絶対ダメ！

「僕が懲らしめておいたので、十分ですよ。2、3日は意識がはつきりしない廃人状態が続くと思いますので、後で警備隊に彼等を保護するように言つておきますから」

母様達の怒りを見て青年が柔らかな笑顔で告げる。

「マジでこの人怖いわ……」

しかしウチの家族は青年の懲らしめた行為に（特に廃人としたという部分。2、3日だからね！2、3日！）いたく感動し、次々と青年とハイタッチをしていった。

おばーさま！おばーさまもハイタッチですか！

つか、絶対に意味わからずには母様とフイーダの姿を見て真似しただけでしょ！

あまりの事にこの光景を受け止められません、私。

「本当に娘に良くしてくれてありがとうね。感謝しても仕切れない

わ

母様が優しい笑みで青年にお礼を言った。

「僕にも彼女と同じくらいの妹がいるから、一人ぼっちになつては彼女が心配になつてした事ですし…」

「いいえ！貴方がいなければラルーが殺されてたかも知れないわ。本当にありがとうございます！感謝しても仕切れない。

あ、そうだ！！今度、貴方のお宅に伺つて貴方のお父様とお母様に改めてお礼をさせていただくから、お名前と住所を教えてくれる？」

「お礼だなんて…。本当に結構です。」こんな事、父に知れたら出しゃばることをするなど怒られてしまい。お気持ちだけで十分です。

「そんなん…。私の息子達が貴方みたいに女の子を助けたら、息子の事を凄く誇らしく思つけど。ねえお母様？」

「ええ。親なら当然、息子の勇敢な行動はうれしく思いますよ。私からも心からお礼をいいます。孫を守つていただいて本当にありがとうございます！」

「僕の父は、残念な事に普通じゃないんです…。すいません。本当に気持ちだけで十分ですから。それじゃ、僕はこれで！」

青年はその場から立ち去つて行つた。名前も名乗らぬ不思議な人だつたな。自分の家族に、なるべく合わせたくない様子だつたけど…

「あれ？ラルー、クラスに買つてもらつた髪留めは？」
フィーダに突然聞かれた。

「あ、あれ…バカ母に踏み潰されかけた…。凄く氣に入つてたの。ああ、クラスに向て言おつ」

「あのクソババアー！蹴り入れてやる」
フイーダが怒つてボー然としているバカ親子のもとに行こうとする。

「やめて！フイーダ！ムカつく親子だけど、今は廢人だつて、あの人言つてたぢやない！」

何もできない相手を蹴るなんて非常識よー。」

私は必死にフイーダを止めにかかる。母様とおばーさまに田線を送り一緒に止めてもらひつように催促すると

「フイーダ、やるなら早くやつちやつこなさい。」

「おばーさまは、後ろを向いていましょうかね。フイーダが今からする事は、おばーさま見えなくつてよ」

母様、おばーさま…貴方達に頼つた私が馬鹿だつたわ！

「ダメー！フイーダー！お願い、やめて」
私が体を張つて止める

「あの…」

ギヤーギヤー騒いでいた私達におずおずと誰かが声をかけた。

皆、その声の主を見ると、やつれ去つて行つた青年がいた。

「言ひ忘れましたが、早くお嬢さんの右肩の治療をしてあげて下さ

いね。では、本当に僕はこれで…

そつ言つて再び立ち去る。

腕の治療…。母様やおばーさまやフィーダを止めるのに必死で痛みを忘れてた！青年に右肩の事を言われ嫌でも意識が痛みに向けられる。

「じつっ！……たああーー」フィーダを止めるのに必死で痛めた腕を上げた為に更なる痛みが私を襲つた。

痛みに悶えながら、ぼんやり去つていく青年の後ろを見やると空から、先程の見た鷹が降りてきて青年の肩に止まつたのが見えた。

おばーさまにその場で治癒魔法をかけてもらい、とりあえずの応急処置を受け、すぐに馬車を呼んで家に帰った。

馬車の中でクラス達の姿が見えないからどうしたのかと聞くと、私を探す為に、小さな子供を見ながらだと探せないので、ラインとカルを屋敷に帰す事にしたらしく、付き添いでクラスも一緒に先に帰らせたといつ。

屋敷に着いたら直ぐに医者を呼んで、腕の治療をしてもらつた。どうやら、エルフは長寿の割には人間に比べて傷や病気に弱いらしくい。

けれど、幸か不幸か私はハーフエルフの為、骨が折れてもエルフよりもダメージが少ないらしく（骨折が中々治らず死んでしまうエルフもいるみたい）骨を再生する呪文も直ぐに効いた。

まあ、効いたと言つても折れた骨が薄く、くつついているだけでしばらくは安静にしなきゃならないうらじいナゾ。

しかも2、3日は骨が折れた事と治癒魔法の反動で高熱が出るとの宣言つわ…。もちろん、宣言通りの高熱が出てきましたとも。ああ苦しい…

しかも私の安静を確保するため、兄妹達とは別室に移されてしまった。しかし、私が不安にならないよう母様とおばーさまが交代でずっと側に付いてくれている。

クラス達には悪いけど、母様とおばーちゃんを独占したよつやうれしいなあ！腕を折ったかいがあるかも。

今はおばーちゃんがついてくれてお昼を食べさせてくれた。

私が食べ終わつてしまはらくするとパソコンと部屋の扉を控えめにノックし、クラスが入つてきた。

「おばーさま、僕がラルーに付いていますからお飯を食べてください。母様は、お仕事が立て込んでしまつてすぐにこなはりに迎えないうしきので、僕が代わります。」

「あら、そんな時間かしら？ そうね、そうしましようか。ラルー直ぐに戻りますからちょっと待つていてね。クラス、それまでラルーの事お願いね。」

そう言つておばーちゃんが部屋から出て行つた。

「ラルー、熱は下がつた？」

心配そうな顔したクラスが私のおでこを触つて熱を確かめる。

「まだ、結構あるね…。大丈夫？ 辛くない？ 欲しいものがあつたら言つんだよ」

そう言つながらクラスは優しく頭をなでてくれた。

私は、クラスに對して悶々としている事を口にした。

「クラスごめんね。心配かけて…。それにせつかく買つてもうつた髪飾りを壊しちゃつて…本当にごめんなさい」

「あれは、ラルーのせいではないもの。気に病む事なんて全くない

よ。また今度買つてあげるから気にしないで

そう言つてクラスは優しく私の頬をなでてくれた。
もうなんて優しいの！大好きな兄様だ！

「ありがとう」

私はクラスに微笑んだ。

そして、ずっと不思議に思つていた事をクラスに聞いた。

「ねえ、なんで母様達は私の居場所がわかつたの？」

「実はね、ラルーと別れた後、ラルーを散々探したんだけど見つけられなかつたんだ。

けど、しばらくして母様達とは出会えたから、事情を説明してる時に突然、空から鷹が降りてきて、僕達に何か言いたげに、しきりに鳴くんだよ。

最初は何なのかよくわからなかつたけど、しばらくして母様が鷹の後を追つてみよと言い出して、おばーをまとフイーダとで鷹の後を追つて行つたんだ。

そうしたら、まさかのラルーが居たつてわけ

クラスがクスクスと笑いながら答えてくれた。

「鷹が！？」

あのね、私を助けてくれた人が鷹を呼んだと思つたら、よくわからぬ言葉で鷹に話し掛けた後に鷹が飛んで行つて、その後に母様達に会えたの！」

興奮した私が支離滅裂の言葉で説明すると、さすが生まれた時から一緒にいたクラス！ 言いたい事をわかつてくれた。

「…。つて事はさ、その人、鷹と話せたんだね。

昔、読んだ本に古代のエルフは、動物と話せたつて書いてあつたな。だけど、今は、その能力が薄れていつてるみたいで、殆どのエルフは動物とは話せないんだ。

ただし、一部話せる人達も極わずかだけど残つているんだつて

「へえ、そうなの。じゃあ、あの人は珍しいエルフなんだね」

まあ、眼鏡かけたエルフ自体今まで会つた事無いから、珍しい体质なのは、そのせいなのかも。

エルフは一概に目が非常にいい種族なので人間みたいに眼鏡をかける人を私は見たことがない。

「その一部の人達はどんな人達なの？」

「動物と話せる能力を重要視して、話せない者達との交流を避けて辺境の地で少人数で暮らしている一族が数グループいるみたいだよ。まあ、古代の能力を絶やさないように血族結婚をしている人達がいるって事だよ」

「じゃあ、私達は絶対に動物と話せる能力なんて持てないよね！」

「エルフの血が半分しかないからね。でもさあ、傷や病気に対する生命力や体力は、エルフ以上に強いんだから、それに感謝しようよ」

「うん！」

バタバタバタ、バターン！

クラスと微笑みあつていると廊下からけたたましい音と共にカルとラインを小脇に抱えたフイーダが入ってきた。

「クラスだけラルーに会うなんてズリいよー・チビ達だつてラルーに会いたいよな？なあ？」

フイーダの問い掛けにラインは泣きそうな顔でこすらを見る

おそらく無理矢理フイーダに連れて来られたんだろう。

「ねえたま！ねえたま！だつくうだつくう」

小さなカルがフイーダの腕から逃げようと身をもがき、私に腕を伸ばし抱っこしてとねだる。

げ、激カワ！

「カル～！ねえたまも会いたかつたよ！」

腕を固定しているのでカルの事を抱っこできない私に気を使い、クラスがカルを抱き上げた。

小さな手で一生懸命頭を撫でてくれる。

「ねえたま、いたい、いたい。どつかいつた？」

ああ癒されるわあ…

「うん、カルのおかげで大分良くなつたよーありがとう」

「姉様、早くよくなつてね」

ラインがフイーダの拘束からやつと連れられたらしく、怪我をしていない方の手を握つてかわいい顔で聞く。

「ラインもありがとうね。もう大丈夫だよ！治つたらまた一緒に遊びまうね」

「やつぱり、家族の力は凄いよな！ラルーの顔色が俺達が来る前より格段に良くなってるー！」

フイーダがエッヘンと威張りながら言った。

「馬鹿が、お前は…ラルーの熱が上がったんだよ。さあ、お見舞いが済んだら早く出てけよ！ライン、カル、もうちょっと我慢してね。

そして、ラルーはちよっと寝る事…さあさあ、各自、言われた事をしつかりやるー！」

クラスが仕切だすと既、有無言わずに従わざるをえない。

私は仕方なく寝ることにした。

どのくらい時間が経つたのだろう。

目が覚めると真っ暗だった。窓に目を向けるとカーテンが閉じられているから、おそらく夜だろ。きっとよく寝ているから私を一人にしてくれたようだ。

起き上がるのも億劫なので横になつたまま天井を見上げる。

。

。

。

さ、寂しい……誰か来てえ

暗いのは平気だけど、いつも静かだと逆に落ち着かない。

ねえ、誰か様子を見に行こうと思つ人はいないの！

しかも右手を固定されているから寝返りすら打てない。

どんだけ頑丈に止めてるんだよー少しイラッとしながらため息をついた。

早く皆と一緒に寝たいよ……

物心ついた時には、周りに必ず家族がいる騒がしい環境だったから寂しいって思うことが無かつたし、逆に早く独立して一人になりたいと願っていた。

けど、いざ一人になつてみると（一人といつても、今は一人で寝るだけだけど）寂しくて落ちつかない。

自分ではない誰かと一緒にいる事は私にとっては、落ちつける環境だつたんだなあ。

しみじみ思つてゐるジジワツと涙が出てきた。いかん、いかん！独り寝（）ときでホームシック（？）にかかるとは…私、まだ熱が高いのかなあ。

ガチャ

扉が開いて誰かが部屋に入ってきた。

やばい！赤ちゃんでもないのに泣いてた事がばれる…すかさず、目を閉じて寝てるふりをした。

コツコツと足音が近づいてきた。

誰だらう？母様かな？

うつすら薄田を開けて見てみると、そこに立っていたのは、なんとおじーもまだつた。

ヒイエエエーーーおじーさまと二人きりになるのは、笛の稽古をサボつた時以来だ！

気まずい事この上ない！寝たふりを続けて嵐が去るのを待つのみ！

心臓がバクバクしているが、それを悟られないよう、規則正しい寝息を繰り返す。

はーやーー出でつてー夜遅くにレディの部屋に入つてこないでよーーー

母様ーたすけてええーーー敵がー敵が攻めてまいりましたー私を避難させてください。

いくら心の中で強く念じてみても、もちろん助けが来るわけでもない。

こちらの心境に気づく事もなく、おじーおまはベッドの隣にある椅子に腰を下ろして私の寝顔を眺めている。

頭の中は警報が鳴りっぱなしでひどく動搖して焦つてしまい、私は鼻と口から同時に息を吸い

「ンゴオオ」と盛れないびきをかいてしまった。

最 悪

ただでさえ、お祭りで迷子＆一悶着を起こして腕を折り、その上に盛大ないびきをかく孫娘つて…

最悪だわ。。

「驚いた。いびきまでもが、デニールとそっくりだよね…」

おじーおまは、嬉しそうに小さな声でつぶやくと、私の頬を人撫でした。

はつ?デニール?誰それ?

デニールは本物のいびきかもしれないけど、私は緊張のあまり呼吸

が乱れて結果、いびきになつただけだから！
根本がもうデニールとは違うからね！

心中でシッコミながら寝たふりを続ける。

「デニールよ、お前は姪の姿を借りて私の元に戻つてきてくれたのか？？」

私の事を許してくれたのか？

それともまだ怒つているのか？」

おじーさまが私の寝顔に向かつて小さな声で話しかけた。

何？何？何？

寝てる孫に向かつて何訳のわからない事言つてきてるんですか？！
何これ、無茶苦茶怖いんですけど…！

一刻も早く、立ち去つてくれ！

その思いも虚しくおじーさまは椅子に座つたまま、私を黙つて眺め
続けた。

- 1 時間経過 -

おじーさま、しつこいにも程があるわー本当にお願ひだから、帰つ
て！

- 3 時間経過 -

黙つて人に寝顔を見続けられて、こんなにもプレッシャーにな

るなんて、初めて知った…。辛い…

- 5 時間経過 -

ねえ、これ何プレー？

- 6 時間経過 -

……。死にたい…。

チュン、チュン！小鳥の軽やかな囀りと共に部屋の中に太陽の柔らかな朝の日差しが差し込み部屋を明るく染める。

「ラルー！おはよーー！」

昨日は仕事で相手できなくてごめんね！今日は、お父様に仕事押し付けるから母様と一日一緒にいようねーって、うわああああ！ラルーの枕元に、し、し、死神？！」

母様が元気よく朝の挨拶をしに部屋に入つて来ると予想しなかつたおじーさまの姿に度肝を抜かれ、黒い服を来ておじーさまを思わず死神と間違えた。

「何がおはようだ！」

病に伏している娘をよく寝ているからと黙つて夜中に一人にするなんて！お前はそれでも母親か！？恥を知れ、恥を！」

「えつーつて事はお父様、ずっとラルーについていてくれたの？」

母様違う。ついていたんじゃなく監視されてたのよ…

「い、いや…、さつき通りかかって様子を見てただけだ。私はもう行く。」

おじーをまばたかせ立ち上がると部屋から出ていった。

「へえ…お父様も良いとこあるじゃない。

ねえ？ラルー！…ラルー？ビビったの？何シクシク泣いてるの？え
？え？」

やつとおじーさまの愛情ある監視から解放され喜びと今までの数時間に及ぶ苦行に思わず泣けてしまった。

もちろん、この精神的なストレスでこの後、熱がしばらく続いたのはいつまでもない。

やつと骨がしつかりとくつつき、お医者様から兄妹や母様と同じ部屋で寝起きをしてもいいとお許しが出たのは、新年をあと2日残してた頃だった。

良い機会だからと、そのまま一人部屋を与えられそうになつたが、まだいらないと断固拒否をし、晴れて昨日から狭いベッドで親子六人「州の字」で寝ていた。

ああ、この狭さから生じる密集度合いが冬場は暖かくていいのよね。フィーダの寝相の悪ささえも一人じやないと実感できて、ある意味快・感…！

侍女さん達に起じられ支度を整えると、食堂に向かつ。食堂では既におばーさまとおじーさまが定位置に座つて朝食を食べていた。

「「「「おはよっ」」」

「皆、おはよっ。ラルー、久しぶりの六人一緒にベッドはよく寝れ

たかしり?

微笑みながらおばーさまが聞く

「はいーぐつすり寝れました。」

私は、元気よく答えた。

朝食が運ばれ食事を取つていると、コーヒーを飲みながら珍しくおじーさまが口を開いた。

「明日の大晦日、皆出かけるからそのつもりでいなさい」
そつとおじーさまは出ていってしまった。

何?出かける?..ビックく?

私達兄妹の顔には「?/?/?」という表情が浮かんでいる。

「もつ、クリスラー（おじーさまの名前）つたら言葉が足りないんだから...。」

おばーさまが苦笑しながらおじーさまに文句を言った。

「あのね、明日は大晦日でしょ?毎年、大晦日になると国王が貴族とその家族を宮殿に招待して、新年を祝うパーティーを開くの。当然、今年は貴方達も呼ばれているから、皆で出席しましょううつておじーさまは言いたかったのよ」

おばーさまは、私達に満面の笑みを見せながら、おじーさまの言葉の補足をした。

「えええ...まだあの新年のパーティーやつてるの?
本当、国王も飽きないわね...。お父様とお母様で行つてらして。私達は、仲良くお留守番していますから!」

母様がさも嫌そうな顔でおじーさまの提案に拒否をした。

「必ず家族は出席する決まりなのよ。ヒルザも知つてはいるでしょ?きっとお父様も貴方達を紹介するいい機会だと思っているのよ。あそこで貴族の面々に紹介する事で、この子達はサルン家の者と皆に

認識されるわ。

そうすれば、この前みたいな、変な輩に子供達が絡まれるのを防ぐ事ができるとお父様はお考えなのよ…。

これもお父様なりの愛情よ。わかつてあげなさい」

いつになく、おばーさまの口調が厳しいので、空気がピンと張り詰めた。

「……でも……。

そうだわ！私達パーティーに来ていく服なんて持つてないもの。日前お世話になつてる、お父様とお母様に恥はかかせられないし…。ああ残念だけど今年は…」

母様が嬉しそうに答えた。

「安心なさい。今日、仕立屋を呼んで、今日中に仕上げをせるように言つてあるから、ドレスに関しては何にも心配いらないわエルザ

おばーさまが一ヶ口リ微笑みながら母様の話しに被せて黙らせた。

「ぐつ……」

おばーさまのダメ押しで母様とおばーさまの攻防は、一気におばーさまに軍配が上がった。

母様：母様の負けだわ。

今回の事に関しては、おばーさまが1枚も2枚も上手です。さすが母様のお母様だけあつて母様を黙らせる用意周到ぶりにに驚きを通り越して、一種の爽快感まで感じさせる。

でも正直、エルフの貴族つてあのバカ親子みたいな人達ばかりっぽ

いから気持ちとしては行きたくない。

しかし、私達が今いるパチーノの国王様かのお呼ばれなら行かざるを得ないか…

ああ気持ちが重いよ。

朝食を食べ終ると私達は採寸や生地選びで一気に忙しくなった。

私達6人の服を作るべく呼ばれた仕立屋さんの数は述べ100人程。私達兄妹は、大きな部屋の一室に通されると、ほぼ下着姿に近い恰好にされ次々に体のあちこちを採寸された。

ちなみに母様は、隣の部屋で母様の子供の頃から服を仕立ててくれているなじみの仕立て屋を呼んでドレスを作っている。

まあ子供用の服と大人用の服の生地も違うから、じゅうじゅうにならないような配慮なんだろうね。

採寸が終わると私達一人一人に生地が宛がわれ、それをおばーさんが見て片っ端から判断を下していく。

「クラスにはもつと深い色の方が似合つから浅黄色は却下！」

うーん、カルはもつと上品で明るい色が似合つわ。その奥の生地を持つて来て見せてみて。

……。そうね……なんかイメージと違うかしら……次の生地を持つてきて。

まあ、ライン！その薄紅色の花柄の生地は、貴方の美しさを存分に引き出すわね！その生地でドレスを作つてちょうだい。

あらあら、フイーダ、じつとしてなさい。えつ？くすぐつたいの？うふふ、我慢よ我慢。男の子は何事にも我慢が肝心ですよ（笑）

あつ、ちょっとそここの貴方！ラルーは私と同じ瞳の色だから明るい縁はやめてちょうどいい、似合わないから。

あら！やだわ。だからといって髪に合わせて、赤色なんて、あまりにも芸がなくてよ！それも無し。早く下げる。

髪の色が濃い赤だからやつぱりこの子にも深い色があつかしい。右の生地を併せてみて！…。却下！次を見せて！」

おばーさまは、いつもの優しい雰囲気が全くなく、まるで鬼軍曹のようないきびきびとした指令を仕立て屋さん達に繰り出し、私達に似合つ生地を見ていく。

でも、なんかいつもより、生き生きしてる気がする

ようやく生地が決まると、次は怒涛の型選びと細かいチェックが待つていた。

「その型でいいけど、もつとフィーダの襟にギャザーを寄せて、そう！そんな感じね。

ラインの裾は、色を変えた方が動きができるわー」この布に合つ生地を持つてきて！

ラルーの袖を後10cm膨らませてちょうどいい

クラスの靴はもつと先が細い方がいいわね

あら！カル良く似合つていいわよ！でもズボンの裾は、そんなに膨らませないでちょうどいい

ほぼ一日中、おばーさまの指示のもと着せ替え人形状態の私達は、

全てが終わる頃には既べつたりと疲れ果てていた。

後で聞いた話しだが、おばーさまは、結婚する前に自らのブランドを立ち上げる程にファッションセンスが大好きなんだそうだ。おばーさまが「デザインし、売り出した洋服は貴族のみならず全世界に流通し、人気を博した」という。

それをおじーさまとの結婚を期に一切やめ、今では当時出した服が高値で取り引きされるほどのプレミアが付いているといつ。

ファッション業界から引退した今でも、「サルン夫人」と言えばファッションリーダーとして注目されており、見立て上手なおばーさまは、パーティーサーズンになると貴族の奥方から見立て欲しいと依頼が殺到し、引っ張りダコになるといつ輝かしい経歴の持ち主だった。

やっと大仕立て大会から解放され、夕飯を食べる頃には、疲れがピークに達し、重い身体を引きずつて食堂に入ると、そこには、おじーさまがいた。

「今日は、お前達と私だけの夕食だ。さあ、食べなさい」と言い食事を促した。

しかし、本音を言えば疲れきっていた私達は、食事を取ることも忘れ、眠りたい！
でも、そんな事おじーさまには言えないの、ノロノロと食べはじめた。

食事を始めてから1分後……

ウトウトしてスープの中に顔を突っ込む者、サラダを食べる途中で意識を無くし口から葉っぱを出しながら寝てしまった者、パンを食べている途中で寝てしまい、パンを握りながら昇天した者、口を動かしながら寝てしまい、重心が後ろに傾き椅子ごと転がり落ちる者など、食べながら多彩な寝方を見せる子供達。

その光景を見て思わずスープを吹き出したおじーさま。

な、なんだこの子達は！？何かの呪いでもかかっているのか！？

「誰か！誰かいないか？」

シーン……

はっ！…そうだった！アビゲイル（おばーちゃんの名前）から言われていた事をすっかり忘れていた！

＝1時間前＝

「クリスラー、ちょっとよろしくかしら？貴方に折り入つてお願いがあるの……」

いつも穏やかに微笑んでいる控えめな妻から「お願い」とは…！？おそらく結婚してから初めての事じゃないか？

「お前から、お願いとは驚いたな。私にできる事であれば言になさい。」

アビゲイルの顔がパアツと嬉しそうに綻んだ。

久しぶりに見るその表情に思わず、皿の口が綻んでいる事に気がつくと、またいつも固い表情を保つのに努めた。

「明日、子供達が着て行くドレスを今日中に仕上げてしまいたいの……。

腕の良い職人を手配したのだけど、この時期、ヨーロッパの貴族もドレス選びに必死だから、手配できた職人の数だけでは、到底間に合わないのよ。

だから、屋敷の者達、総出でドレスの仕上げをやせたいただきたいんです。

もちろん、貴方達のお食事の用意はするよつておきます。ただ、その間、子供達と貴方で夕飯を取つていただけないかしら？ ハルザもまだ手が離せないから、夕飯には同席できないと思つ……。」

「別に構わんよ。」

「まあ、クリスラーありがとう、子供達も聞き分けが良いし、クラスがしつかりしているから、多分、貴方の手間を取らせる事なんてないと思うわ。」

そんな会話を思い出す。

アビゲイルよ…………。

心の中で妻の名を呼んでみる。

もちろん、状況は変わらないのでため息と共に立ち上がる。

「い、じりー頭をスープ皿から出すんだ。うう……顔がスープだらけではないか！今顔を拭くから。はっ！…袖で拭くのはやめなさい！」

そのお前はこつまで、口から野菜を出しているんだ。食べないなら吐き出せ。じりー聞こいいのか？ペッしなさい。

そこー椅子から転げ落ちてもまだ寝てるなんて聞いた事がないぞ！起きなさい！

お前達ー食事はもついいから部屋へ戻り寝なさいー。

シーン……

なんだ。いの子らは…。私の大声にもビクともせず寝ているとは…。い、これがハーフエルフの力なのか？

仕方ない…。

手近なところから寝ている子供を抱き上げ子供部屋と食堂を往復し、子供達をベッドに寝かせる。すると一番小さな子供が目を覚まし寝ぐすりをしだした。

「じりー、静かにしないか！お前の兄や姉が起きてしまうだろ？」しかし、幼い子供にそんな話しが、理解できる事もなく、増え激しく泣き始めた。

仕方なく、腕に抱き背中をあわてやる。じりーすると、ヒック、

ヒックと泣き止み始めた。

柔らかい…。久しぶりに小さな子供を抱いた。

最後に子供を抱いたのはいつだつたろうか…おそらくエルザが生まれた時以来だから、数何百年は経っている。

子供特有の甘い匂いを嗅いでふとそんな事を思い出す。

ギュッと首にまわされた暖かい手と肩の凹みに押し付けられる小さな顔が庇護欲を駆り立てられる。

デニールもエルザも幼い時に抱っこをせがんでよくそのまま寝てしまっていた。

そんな遠い優しい日々を思い出すと同時にいつも心の中にある罪悪感が現れる。

「デニール……すまなかつた。私が…お父様が悪かつた。」
そのまま口から言葉がこぼれた。

すると眠つたと思っていた、幼子が目を開き

「としゃま…。だいすきよ」と言つて私に微笑みかけると安心したよつにまた私の肩の凹みに顔を擦りつけ寝てしまった。

きつとこの子は、自分の父親が死んだ事が理解できずに、大人の男に抱かれて、私を父親と間違えただけだ。

そう思いながら、涙が幾筋も頬を伝わり落ち、この子に涙がかからないよう必死で顔を背けた。

私達は、泥のように寝むつていた為、朝になつても目を覚まさず、侍女さん達に起にされても中々起きれなかつた。

「エルザお嬢様！クラス様！ラルー様！フィーダ様！ライン様！力ル様！！！」

もういい加減起きてくださいまし。旦那様と奥様がもう食堂にいらっしゃつしゃつて皆様の事をお待ちですよー。」

何度も呼んでも反応しない私達に痺れを切らした侍女さん達の大きな声で無理矢理起こされ、服を着させてもらい食堂まで連れていかれた。

寝ぼけ眼で食堂に着くと爽やかに微笑むおばーをまじょひり不機嫌そうなおじーをまに出迎えられた

「あら、今日は、皆お寝坊さんね。早く席に着いて」

おばーさま…。昨日、あんなに忙しいそうにしていたのに、疲れ一つ見せないどころか、肌の艶が良くなつていて、神々しいくらいの美しさだ。きっと、自分の好きな事に夢中になると口頭のストレスも解消してしまうのだろうか。

「お母様のバケモノ…」

母様が小さな声で、呟いた。

母様が大仕立て大会から解放されたのは明け方近くになつてからだという。

しかも、母様が自室に戻る時も、まだ、おばーさまは忙しいそうに働いていたらしい。

母様で無くても呴きたくなる気持ちはちょっぴりわかる。

「え？ エルザ何か言つたかしら？」

穏やかな笑顔でおはーちゃんは母様に聞く

「いいえ、なんでもないわ」とすかさず、母様も笑顔で返す。

おばーさまと母様つて顔から性格まで本当に似ている。

「さあ皆、ご飯を食べたら昨日作った服のフィッティングをして最後のチェックをしますよ！」

支度をしましょひねー。」

嬉しそうなおばーちゃんの声が響く。

私達はうなだれながら答えた。

そういううちに私達の元へ朝食が運ばれてきた。

「うまい！ こつもと回じメーラーだけじ、今田のせ、スッパンくわいいしい」

「本当に凄いおいしい！」

クラスもそれに答える。

「そりゃー？いつもと同じ味だけど……」

母様が不思議な顔で答えた。そのやりとりを聞きながら、ふと思つ。

「あれ？私、昨日夕食つて食べたっけ？なんか昨日の夕方から記憶がないわ……お腹も凄い空いてるし……ラインは、覚えてる？」

「……。そりゃー、私も思い出せないかも。食堂までの記憶はあるけど……クラス兄様は？」

「あれ？僕、パンを食べようとしたまでは、覚えてるけど食べただっけ？」

「俺も、席に着いた所までしか覚えてないな」
フィーダがモグモグと口を動かしながら答えた。

「あら？あんた達、お父様と一緒に夕飯食べたんじゃないの？お父様、この子達と一緒にだつたのよね？」

皆の視線が一気におじーさまに集まる。

「…………。

「ああ……一緒に食べた……。」

「ほりー！食べたんじゃない。」

疲れて記憶が曖昧になつてただけよ！聞いてお母様、この子達つたら、凄いのよ！疲れ果てて、昨日の服のまま寝てたの（笑）」

母様が「ロロロロ」と笑つた。

「あら、 今日の方が忙しくなるから田畠よつも、 わたと疲れてしま
うかもね……。 いつもここで食べなさいね」

おばーさまが明るく笑ひ回り、 おじーおまめじーとなく居心地が
悪やつにしていた。

昼食を終え、只今お風呂タイムです。

こちらの屋敷には大理石でできた大きなお風呂があり、中央に噴水のよつにお湯が湧き出でいて、不思議な事に湯舟の中にお湯が流れると畠田くなる。なんでも、美容によいお湯になるような魔法をかけているんだとか。

今は、母様とラインとカルの4人でゆったりバスタイム！

お風呂は、ここに来て唯一最高と思える所だ！

考えて見れば、ちょっと前までは、夏は川で水浴び、冬はお湯を絞ったタオルで身体を拭くくらいしか出来ず、初めてお風呂を見た時には大きな水瓶かと思つた程だ。

使用法を聞いた時には、なんて贅沢品なのかと驚いたが、今はお風呂無しでは生きていけない程こよなく愛している！きっとお風呂が人なら何もかも捨てて駆け落ちできるくらい好き！
ビバ金持ちライフ！

お湯に浸かりながら「うう」とうしているとラインがオドオドしながら聞いた。

「ねえ母様、新年のパーティーってどんな感じなの？」

「うーん…。そうねえ…。

予め言つておくけど、きっと私達にとっては、あまり楽しくないわね。

エルフ至上主義の貴族が殆どだから、人間と結婚した私やハーフエルフのあんた達が周りから何て言われるかは行かなくてもわかるわ。でもね、中には本当にいい人もいたりするから、パーティーも良し悪しね

苦笑しながら、母様は答えた。

「じゃあ、王族の人達も感じ悪いんだ」

ため息を付きながら聞いてみた。あのバカ親子みたいな人が国のトップと思ひどりんよりする。

「確かに王様は、厳格な人で何よりエルフの血を重んじる人だわ。でも、王妃様はポヤつとした、かわいい感じのいい人よ。まあ、ポヤンとしてるかガツガツしてると王族なんてやってけないけどね」

遠い目をして母様は言った。

「私、行きたくないな…」

ラインが呟く。

「あら、パーティーに出て来る料理は、この国一番の職人が腕に寄りをかけた逸品よ！」

しかも、見たこともない食材がズラリとならんで一口それを口にすると天にも登る程美味しいのよ！

し・か・も、催し物がいっぱいで豪華プレゼント付き！
パーティー中ずっと流れる音楽も最高なんだから！」

母様は、おどけた表情で大袈裟に身振り手振りを加えてなんとか私達がホツとするような話を繰り出してくれた。その熱演を見たライオンは最後には「面白そう！」と笑った。

そういうしている内にお風呂の扉の外からおばーさまの声が飛んで来る。

「ちょっとー貴方達いつまでのんびりお風呂入ってるの？クラスやフィーダが待ってるのだから早く出なさいー。」

「ああ…。今日は、頭のてっぺんから足の先までいじくり倒されてお母様の着せ替え人形にされるわよ。覚悟しなさいね」

母様がボソッと小声で私達に言った。

＝ 3 時間後 ＝

母様の宣言通り私達は、生きる着せ替え人形となっていた。

昨日仕立てた私のドレスは、深いワイン色のベルベットのような生地で出来ており、所々に真珠が縫い付けてある。一体いくつするこの服！

更に同じ生地に同じく真珠を縫い付けたリボンを使って頭のサイドの髪とリボンを編み混み後ろで一つの長に三つ編みのような感じにされた。

顔にはうつすら化粧までされ、全て出来上がった自分の姿を鏡で見てビックリ！

「、これが私ですか！？」

お姫様みた～い！！地味顔の私がここまで綺麗になれるなんて！何度も角度を変えて鏡を見ても、完璧にお姫様みたいだ！

嬉しくて、皆に綺麗になった私を見てもうれしつづキウキウしながら居間への扉を開け、私は仰天した。

母様……！なんて綺麗なの！金髪に映える緑色のキラキラ輝く布で出来たドレスで歩く度にキラキラが飛び散って消える。

胸元は大きく開いているが、嫌らしさを感じさせず逆に上品さが漂う。

髪は横に流してエメラルドの髪飾りがまた似合つ。

ラインも薄紅色の花柄のドレスに身を包みハイウエストの形が可愛らしくラインの雰囲気にピッタリだ！サイドの髪だけ結んで小さな薔薇で飾っている。

おばーさまなんて銀色のこれまた光り輝くドレスを纏い、髪はそのまま下がりおどぎの国の女王様みたいに美しい！

デコルテには、見たこともない綺麗な青い大きな石のペンダントが

もちろん、クラス達だって絵から抜け出てきたような凜としたかつてよだつた。

私の顔でお姫様になれたんだから、元々美しい顔の人達が着飾れば、
その姿は、神クラス……

身のほど知らずでした。私の自惚れた気持ちは、開始三分で跡形もなく砕け散つた。

「ラルー見違えたね。いつも可愛らしげ、今日はお姫様みたいだよ！」

「姉様！本当綺麗だわ！」

クラス、ラインやめて…本物の王子様&お姫様バリに美しい人達から褒められてもよけいに痛いから。

「あ…ありがとう。」私はヒクヒクしながら微笑んだ。

「皆、凄く似合っているわーおばーさま霞んじゅうわね」

霞みませんって！私と並べば、むしろ引き立ちますって…

早くも私は、白由になりながら王宮に向かうべく馬車に乗つた。

やばい、まだ新年会パーティーに行つてないのに、既に帰りたい…。

馬車に乗り込むと、これは本当に馬車の中かと驚く程広かった。つか、広すぎだろ…明らかに外観より中の方が広い。

馬車の中は、床一面に白いフワフワの絨毯が引かれ、暖炉までついており、パチパチと薪が真っ赤になつてている。

暖炉の周りには坐り心地の良さそうな、ソファーとロッキングチェア！

どうなつてゐるこれ！しかも、馬車の中なのに全く揺れない。

呆気に取られていると

「貴方達、王宮の馬車は初めてだつたわね。パーティーに招待されると王宮から迎えの馬車が来るの。

招待客がゆつくりできるように魔法で内装を変えているのよ」

おばーさまが説明してくれた。

ほえええ…さすが王様。やることがでかい！

驚き呆然としている間に馬車は王宮についていた。

凄い早いなあと思い降りる時になんとなく馬を見るとそこには立派なペガサス……

父様、本当に何でもありなエルフの国です。驚き過ぎて寿命が縮みまくりです。

馬車を降つると、目の前に大きな滝がドドドーと盛大な音を立て

ながら凄い勢いで流れ落ちている。
ど、どこから入るのこれは！

「大丈夫よ。ついてらっしゃい」おじーさまが颯爽と滝の中に入つ
ていき、おばーさまがカルを抱き、母様はラインの手を引いて後に
続いた。

「ねえ、何が、何処らへんが大丈夫なの！全く、意味がわかりません
が…」

「ラルー、ファイーダ…」

「3つ数えたら大きく息を吸い込んで入るからね！…」

クラスが意を決し、私とファイーダの手を強く握つた。
ゆっくりとクラスが3カウントを取り、大きく息を吸い込むと私達
は、一気に滝の中に入った。

うー！ー！ー！うつ？えつ？えつ？

急降下してくる大量の水に押し潰されるのを覚悟して飛び込んだの
に、水に濡れる事なんて全くなく、逆にホワッと暖かい。
滝を抜けると、いきなり明るくなり、壁も床も全て水晶で出来てい
る長い廊下に出ていた。

ゆっくり周りを見渡すと笑いを堪えている、おじーさま、おばーさ
ま、母様の顔が見えた。

「びっくりした？（笑）私も最初に来た時、凄く驚いたのよね。

あの滝はね、招待されたお客様は通れるけど、そうでない人は滝に流
されて、滝壺の中に真っ逆さまに落ちる仕組みになつていてるんだ

つて！

滝壺に真っ逆さま…

どんな鉄壁の防御なんだよ。まあ、招待してない不埒な輩が簡単に入らないようにしてるのはわかるけど。それにしたつて招待客すらビビるわ！

訝然としない気持ちで廊下を進んでいくと大きな広間に出了。

広間は、金色の水晶で出来ていておそらく王様と王妃様が座ると思われる水晶で出来た背もたれが長くデザインされた椅子が二脚おいてあつた。

そのすぐ横には、妖精による不思議な音楽が奏でられており、更にそれより手前には長いテーブルにズラッと美しい料理が所狭しと並べられており、香しい匂いで誘つ。

ファンタスティック！！

その一言につきるわ。

「おや、これはサルン伯爵ではないか！久しぶりですな！

奥方も変わらずにお美しい！

ん！？君は……エ、エルザかい？驚いた！何十年ぶりだろ？

「これは、ミステイーク公爵様お久しぶりです。お元気そうで何よ

りですわ。家出娘がこの度帰つて参りましたのよ。」

母様が営業スマイルで対応する。

「君が人間の男と結婚したことは噂で知つたよ。と、するといこの子達は……」

「はい。私と愛する夫との間に生まれた天使達です。私の大事な宝物ですの」

「これは、これは……。君に似て美しい子達ばかりだね！」

「オホホホ！自慢の子供達ですわ！」

一見穏やかに見える会話だが、このミステイーク公爵は明らかに私達を見る目が冷たい。

「ミステイーク公爵。いい機会だから、私の孫達を紹介しよう。左から、クラス、フィーダ、ライン、ラルーそしてカルだ。お前達、挨拶をしなさい」

「…………」

おじーさまが私達の事を孫つて！？しかも名前まで覚えててくれたの？

私達家族は、皆あまりの驚きに口を空けたまま、おじーさまで注目した。

事情を知らないミスティーカ公爵だけ「？」という顔をしていた。

「お父様！」

「クリスラー！」

「「「おじーさま。」「」「

口々に叫びおじーさまに抱き着く。

「「、「こりー離しなさいーー服が伸びる……子供達ーーあ、挨拶を……挨拶をちやんとしなさいーー」

そこで漸くミステイーク公爵の存在に気が付き慌てて挨拶をする。

「クラスと申します。お会い出来て光栄です。公爵」

「私は、ラルーと申します。この地に来て間もないでの色々とどう教示願います」

「フィーダと申します。公爵様におかれましては、ご機嫌麗しゅう存じます」

「ラインと申します。お目にかかるて大変嬉しく思っています。」

「かるでつ。たんたいでつ。（カルです。三才です）」

パーティーに行く前におばさまに徹底的に挨拶の仕方を仕込まれた私達は、極上の笑顔と共にお辞儀をし、完璧な挨拶をかましてみた。

ちなみにボロが出ないよう、誰に対しても挨拶する時は毎回同じ台詞にしています…。

その姿を見たミスティーケ公爵は、美しい子供達に（私を除く…）純真な笑顔と共に挨拶をされた事に、いたく感動している様子

「サルン伯爵も良いお孫さん達に恵まれ、つらやましい限りですなー」と上機嫌でその場を後にした。

ミスティーケ公爵の姿が見えなくなつたのを見計らつて母様が口を開いた。

「お父様！ ありがとうございます！」の子達を認めてくれて

「クリスラー… 私からもお礼を言います。ありがとうございます！」

母様とおばーさまが涙ぐんでおじーさまに言つた。

「お前の子なら、私の孫だ。当たり前の事をしたまでだ」

罰の悪そうにおじーさまが答えた矢先にカルがおじーさまの足元に近寄つてお願いをした。

「としゃま、だつじちで」

カルあんた幼児だからといって、おじーさまにまさかの抱っこを要求とは！恐ろしい子…

やつと和解出来たからと云つても、これは流石に一足飛び過ぎるつてカル！

空氣読むことを身につけようね…しかも父様つて！私達の父様は、お空の星になつたとあれ程、言い聞かせてきたのに、おじーさまを父様呼ばわりつて！

父様には、悪いけどヨボヨボじじいだつた父様と未だ30代後半くらいに見え、男の色氣を振り撒いているおじーさまとを間違えるなんて…

「カル、僕が抱っこしてあげるから…」とクラスがおじーさまに氣を使つてカルを諭そうとすると、横からカルを掬い上げるように手が伸び、カルが抱き上げられた。

「しようがないヤツだな。ん？なんだあれが食べたいのか。よし、取りに行こう。」

今まで見たことのないくらい田尻を下げたおじーさまがカルを抱き上げて、食べ物が立ち並ぶテーブルに移動して行く。

「お母様…見た？」
「ええ…しつかりと…」
「何？あの豹変ぶり…。私の小さい頃だつて、あんな顔した事なかつたわよ！」

「孫は目の中に入れても痛く無いって言つけど…。何だかんだ言つても、あの人も例に漏れずに孫が可愛いのねえ…」

母様とおばーさまがヒンヒンとおばーさまの態度について話し合へ。

カル…おじーさまが私達に対して作っていた壁を笑顔ひとつでぶつ壊すとは…本当に恐ろしい子！

でも、これで本当の家族になれたんだ！

スッ、ゴくスッ、ゴく嬉しい！

私達兄妹も顔を見合させて笑いあう。すると、カルにケーキを食べさせているおじーさまが私達に声をかける。

「…うちにお前達の好きそうなものがいっぱいあるから、早く来なさいー！」

「…」「はい」「」

私達は元気に返事をして、駄走の並ぶテーブルに向かつた。

「ご馳走はどれも美味しい、頬つぺたが落ちそつなものばかりでさすが王宮ー…と思わず唸つてしまつ。

「ラルーー！あつちに大きな海老があつたから行こいつぜー。」

「うん！クラスとラインも行こいつよ。」

「私はお腹いっぴいだから、母様達といるわー。」

「僕もお腹いっぴいだけど、フィーダとラルーだけじゃ心配だから、一緒に行こうかな。」

何よそれ…フィーダはともかく私が心配つて…内心クラスにツッコミつつ私達3人は、海老のご馳走がたんまりと乗つているテーブルに移動した。

「へ、つまー何この海老料理！超つまー」

「本物ー！」の水色ソースがこれまた海老に合つわー。」

フイーダと共に満面の笑顔で料理を食べている

「お前達、程々しろよ」とクラスが釘を刺す。

「「だつて美味しいんだもーん」」

「…まつたくもー」

呆れ顔のクラス。

すると私とフイーダの間に栗色の髪をした小さな女の子がトコトコやってきて海老料理を取ろうと手を伸ばした。
しかし、テーブルと同じ背の高さの女の子では手を伸ばしても料理に届かない。

「よければお皿を貸して。取ってあげるよ」

小さな子供の世話を焼くのが大好きなクラスがたまらず、その子に言つた。

「いいの？ありがとう」

直ぐにクラスは、お皿に料理を乗せてあげ女の子に手渡してあげた。

「はいどうぞー零がないようこね」

「ありがとうー。」

可愛らしい笑顔でクラスにお礼を言つと、その子は、一心不乱にバクバクと食べはじめた。

あまりの夢中ぶりにお皿を傾けてしまい、海老とソースがその子のドレスにべつとつと落ちてしまった。

「あらあら、ちゃんとお皿を持ってないとせっかくのドレスがシミだらけになっちゃう！」

私が慌てて、お皿を持ってあげ、その間にクラスがドレスに付いたソースを拭き、フィーダが半分しか食べられなかつた、この子の為に新しい料理を取つてきた。

言わなくても伝わるコンビプレー！さすが三つ子だ

「ねえ君のお父様とお母様は？」「ここにいるの？」

クラスがその子に優しく聞いた。するとフィーダから新しい料理が乗つた皿を受け取つた幼女は、料理から皿を離す夢中で食べながら、「いない」とだけ言つた。

いない… ですと？？？

私達三人は顔を見合わす。

「じゃあさ、誰とここに来たのかな？」

今度はフィーダが優しく聞く。

「ここにいるもん。ねえあれも取つてーー！」

料理を凄い勢いで平らげた幼女は、まだお腹が空いているらしく、料理を乗つていた皿に残つていたソースを舐めながら次の料理を催促する。

ここにいるつて？

え？この子、王宮に住んでるの？？？

もしかして、王族の姫君！？

いやいやいや、このガツツキぶりからしてちょっと違ひぬがある。

王宮で働いてる人の子？

でも、父様も母様もいないといつ…

「この子…迷子なんじゃない？」

フィーダが珍しく核心を突く事を言つた。

迷子！迷子の気持ちは痛いほどわかるわ！こんな小さな子が迷子なんて…可哀相に。思わず涙ぐんでしまう。

「ねえ、お名前は何て言つのかな？僕はクラスつていうんだ。君は？」

「ひやーん」フィーダに取つてもらつたパンを頬張りながら答えた。

「え？ ひやーんって言つの？」

私が聞き返すと口の中の食べ物を急いで飲み込んで言つて直す。

「シャ・ラ・ン！」

「シャーランちやんかー可愛らしげ名前だね」

クラスがシャーランちやんの頭を撫でながら言つた。

「シャーラン今度あれ食べたい！」

「どんだけ吃てるのこの子は…」

フィーダが料理を取つて行つている間にクラスと密談をする。

「どうするクラス。シャランちゃん一人にしておけないよ」

「うーん、とりあえず母様達の所に連れて行つて相談しようか。僕らだけでは、手に負えないからさ」

そう言つてクラスは果物やお菓子を手に持ち、フィーダが戻るとシャランちゃんに話し掛けた。

「ねえシャランちゃん、あっちに座るところがあるから、僕達と一緒に座つて食べようか。そしたら、料理を落としちゃう事もないし

ね」

「うん！わかった

クラスがシャランに手を差し出すと一ヶコリ笑つて手を握り嬉しそうにひいて来た。

おじーさま達がいる所まで行くと色々な人達がおじーさま達に挨拶をするべく長蛇の列になつっていた。

マジッすかーおじーさまつて大人気なのね！

私達に気づいたおじーさまが

「あれが上の孫達です」と紹介され、再び例のお決まり文句の挨拶をする私達。それをキヨトンとした表情で見つめるシャランちゃん。

一通り挨拶が終わり、母様達にシャランちゃんの事を話すまで15

分はかかった。

「シャランちゃんの保護者の方が見つかるまで私達と一緒に入ればいいわ」「母様が元気よく答えた。

「シャランちゃん、誰も取つたりしないからゆづくつ食べなさい。あらあら、口にソースを付けて。拭いてあげますね。ほら綺麗になつたわ！」

おばーちゃんは、クラスと同じで小わこ子供に皿が無く、子供らしくシャランちゃんの世話をかいがいしく焼いた。

「王宮の者達に、この子を今当家で預かっている事を伝えてこよ。おじーなんだカルも行きたいと、おじーちゃんは、遊びでいくわけでは無いんだぞ……。

… しょうがない子だ。」

おじーさま…………。しょうがないのは、おじーさまなのでは？おじーさまはカルを抱き、王宮の使用人の人の元へ向かった。

「ねえ、おばちゃんーシャランね、まだ食べたいな……もう少しひ飯やお菓子は、ないの？」

悲しい顔をしたシャランちゃんがおばーちゃんを見上げる。

シャランちゃん、あなたの畠袋は宇宙かい？ビーハのツーハーファイターナのこの子はー！

「シャランちゃん、あまり食べ過ぎるとお腹を壊してしまってもよ
ねばーさまが優しく諭すとグゥーヒシャランのお腹がなる。

「マジッすかーマジでお腹鳴ってるよこの子ー！

「本当にお腹が空いてるのね、この子。ラルー、シャランちゃんに、
料理持ってきてあげなさい。なるべくお腹にたまるものがいいわ」

母様に言われ、料理のブースへ行き、どれがいいかキョロキョロ見
回していくラルーと人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい」急いで頭を下げる。

「僕の方こそ、キョロキョロしてたのですみませんでした…怪我は
なかつたですか？」

ん~。」の声…

どこかで聞き覚えがある声に顔をあげるとセイヒは、黒髪眼鏡のあ
の青年が正装した姿で立っていた！

「「あつー。」

二人ともお互いを指わして固まる。

「ま、まさかこんな所で会えるなんて思つてもみなかつたな！腕は
もう大丈夫？」

「え？うん！すっかり骨もくつついて元通りよ！私ハーフエルフだから怪我とかに強いのー！」

「アハハ！そ�だつたね。

でも、一瞬、君の事がわからなかつたよ。よく似合つてゐるよ、そのドレス

「あ、ありがと… … …お世辞でもうれしいわ」

「お世辞なんか僕生まれてから一度も言つた事ないよ。似合つてゐと想つたからそういうつたまでだよ」

「お世辞なんか僕生まれてから一度も言つた事ないよ。似合つてゐどこのジロロだよ」の青年は…。と内心ツツ ハハながら顔がにやけ る… いかん、こんな言葉で騙されちゃ いかん！

「今日は、あなたも新年会のパーティーに呼ばれたの？」

「えー、うん、そつなんだ… 僕も呼ばれたの？」

「うん、おじーおま達と一緒に招待されたの。あつーまだ自己紹介してなかつたよね？」

「私、ラルー＝スエルと言います。おじーおまがサルン伯爵だから、今日一緒に招待されたんだ。」

「えー君、サルン伯爵のお孫さんなんだ！」

「おじーおまの事知つてるの？」

「えー、あ、うん。サルン伯爵は有名人だからね。ここに来てる人は皆、知つてゐると思つよ。でも君あんまり似てないね。」

「やめて、顔の事は… 傷つくから」

「いつも…いつも…平凡な顔つて事くらい一分にわかつて…るつてんだよ。文句があるなら、明日から平凡な顔で毎日を過ごしてみ

やがれ！

身体的な特徴の事に触れられると心の奥底にいる、黒ラルーが脳内を暴れ出す！

「何の事？僕は、サルン伯爵はなんか近寄り難い感じがするけど君は親しみやすい雰囲気があるから、あんまり似てないと思つただけだよ」

「そ、そなんだ…。あ、ありがとう」

再び赤くなつてしまふ。

この人天性のジゴロだわー氣をつけなくちゃ…

パンパラパンパンパーン

私達が話している途中でいきなりファンファーレが鳴り響いた。驚いて顔をあげると

「パチーノ王、レンジ様、パチーノ国、王妃様アキーム様がお越しになられます。皆様、拍手と共にお迎え下さい。」とアナウンスが流れ広間にいた人々が割れて中央に一本の道ができた。

「ラルー、『ごめん。僕ちょっと行かなきや！会えてうれしいよ！で
きれば、また会つて話したいな』

「え？うん、わかつた！」

そう答えると青年は一ヶコリ笑つて足早に私の隣から去つて行つた。

は！！

こんな所で顔をニヤつかせて、何油売ってるのよ私は…

素早く、テーブルに盛られていた料理を取ろうとするが広間が割れんばかりの拍手に包まれた！

いけない！王様と王妃様が来ちゃったよ！
食べ物持つて人だかりを越えるのはちょっと無理だな…

仕方なく皿を置いた。ふと見ると、林檎がうず高く盛られていたので、赤い林檎と青林檎を一つずつ、両手で掴みタイミングを見計らって母様達の元に行くことにした。

すると人々の間を通り王様と王妃様が壇上に上がった。

「今日は皆、来てくれてうれしく思う。皆の働きに敬意を表し、家族と共に私の心ばかりの感謝の印として、今日は大いに楽しんでもらいたい」

ワアアー！！

溢れんばかりの歓声が広間を包む。

「それと、今日正式に私の息子ベイロの婚約を皆さんに発表したいと思う。ベイロこちらへ！」

再び大きな拍手鳴り渡るその中で一人の青年が壇上に登る。

え…………！

あ、あれって……

さつきの、青年！？

林檎を持っていた事を忘れて、手を口にあてようとして、林檎が落としてしまっていた。

せ、青年が王子様！？

私つてつきり、動物と話せるから辺境の地に住む一族の人だと思つてた……んで、たまたま王宮に呼ばれた的な……。

まさかの辺境の民……からの王子様つて！

青年は無表情で人々を見下ろしている。

「――」のベイルと婚約者の……

「大変で――ぞいます――！」

バタバタと執事のような人が走ってきて、王様に一礼し、なにやら耳元で囁いた。

「本当か？ふむ……わかった。

ベイロの婚約者が体調を崩してしまったらしく急遽、皆にお披露目ができなくなってしまった。

悪いが、お披露目は、体調が良くなり次第とさせてもらおう。それまで今夜の料理や、催しを楽しんて欲しい。

拍手が起き、再び音楽が流れ初めてた。それをきっかけに挨拶に行くもの、料理を取りに行くものなど、人々は、王様がが来る前のよう尼寺好き好んで移動をしていった。

私は、どうしても青年・ベイル王子に逢いたくて、壇上に向かった

が王子の姿がビニにも無かつた。

仕方なく、トボトボと母様の所に行くと
「ラルー！」「飯持つてきてくれた？」と元気にシャランちゃんが声を
かけてきた。

「あーああ、『めんね。王様のお話が始まっちゃったから取りに行
けなかつたの。すぐ取りに行くから、もう少し待つて…』
「ラルー！さつきの王子見た？絶対あいつだよな！」

料理を取りに踵を返そうとした途端に田を輝かせたフイーダに捕ま
つた。

「さつき、会つたよ…。あの人に
「え！王子様にあつたの？すっげー呼んでくれよ！
「偶然、会つただけだから…
それに私もさつき初めて知つたんだもん
ブー垂れた顔で答えていると後ろから大きな声が聞こえた。

「あー、シャラン！…」「こにいたのか？」

振り返るとそこにベイル王子が立つていた。

「全く、いいと言つまで部屋から出るなつて言われただろ？皆お前
の事大探ししてたのに…って、あつ、これは皆さんお久しぶりです
…」

すると、おじーさまが王子の前に歩み出ると膝をついた

「久しぶりですね、ベイル様。先日、孫娘のラルーを助けていただ

「顔を上げて下さご。サルン伯爵。僕は当たり前の事をしたまでです。」

するとおばーさまがおじーさまの隣に行き膝をついた。「知らなかつた事とはいえ、」無礼数々、お許し下さい。」

「おー一人とも、やめてください。身分を隠していたのは、僕の方なんですから…」

王子は、二人の手を取ると立ち上がらせた。

「もしかして、シャランを保護していただいたのもサルン伯爵達だつたのですか？」

「はい。孫達が一人になつていたシャランちゃんを見つけてウチで預かっていました。」

「そうですか…。ありがとうございます。あの、もし、よければ皆さんと少しお話したいのですが宜しこうじょうか？」

おじーさまが皆の顔を見回すと興味津々の顔が並んでいる事を知り「わかりました」と一言答えた。

「では、いらっしゃつて来てください」

王子は、シャランと手を繋ぐと広間の隣にある部屋へと私達を誘つた。

通された部屋は、大きな円卓が中央にあり、壁には大きなこの世界の地図のような物が貼つてある。どうやら、会議室のみたうな感じ。

「貴様へん、お座り下さい。」王子が椅子を勧める。

「ねえねえ、ベイル。シャラン、フィーダとラインとカルとで遊びたいけどダメ?」

シャランちゃんが王子の袖を引っ張り上目遣いでお願いする。
ううつ、かわいい！

「え！…あ、ああ…わかった。じゃあ、この部屋の中なら遊んでもいいよ。フィーダ君、カル君、ラインちゃん。悪いけどシャランと遊んでもらえるかな？」

「クリとラインが頷きフィーダも同じように頷くと
「シャランー何して遊ぼっか？」と笑顔でシャランとカルの手を取りラインと一緒に席を立つて行った。

「すみません…。シャランが人と遊びたいと言つ事自体珍しくてフィーダ君とラインちゃんとカル君には、申し訳ないです…。」
すまなをやうな顔で王子言つた。

「いいのよ。どうせ、あの子達は、じつと座つてられないもの」あつけらかん母様が言つ。

「ありがとうございます。

実は……。シャランは、先程父が今日集まつていただいた方々に紹介しようとしていた僕の婚約者なんです」

「「「「HH—!—!」」」

残つた一同が再び驚く。

「うちは、リアクション芸人一家か？って思つくらい素敵なりアクションで返す。

「だつて、王子も十分若いけど、シャランちゃんなんてまだカルとそんなに年が変わらないくらいの子供よー。」

母様が身を乗り出して聞く！

母様…王子に対するフランク過ぎです。

「まあ、いつかはシャラン殿も成長する。王も、それまでは婚約者としての立場とこう事で見守るおつもりなんだね。」

おじーさまが静かに言った。

「成長…ですか。皆さん、シャランはいくつだと思いますか？」

「見た目は、5才くらいに見えますが…？精神的にも幼いように感じますので実年齢的にもまだ10才前後では？」

クラスが思案顔で言った。

「実は……シャランは、ああ見えても125才なんです。」

「「「「HH—!—!」」」

再び驚きの声をあげる私達。

「125才つていつたらエルフでも見た目は、十分大人に見えるはずよ。」

母様が再び身を乗り出して言つ。母様、母様が身を乗り出す度に横にいる私に胸が当たりますので座つて下さい。

「実は、彼女はパレス山という山奥に住むパーム一族の長の孫なんですが、まだほんの赤子の時から、両親から虐待を受けていたみたいで、満足にご飯も与えられ無かつたそうです。」

そして、シャランが5才の時、母親と父親から森の中で折檻を受けた際に魔族に襲われたそうで……。なんとかシャランだけは、一命を取り留めましたが、目の前で両親が殺されたショックと虐待を受けた心の傷から大人になる事を拒否し、自ら成長を止め、更に精神的にも幼いまになってしまっているんです。」

悲しそうな顔で王子が続ける

「彼女一族は、エルフの元種に最も近く、動物と話せ、植物を操る力を持つち、その血を重んじる為に血族結婚を繰り返していました。彼女が成長を止めたのも、その強い力の影響が出ているのかもしきません。」

そして、王族の直系も代々動物と話せる力を持つてるので、その血を薄れさせないためにエルフの血を重んじる一族と代々結婚していました。

しかし、僕の代になるとシャランの他に動物と話せる女子がいなく、

シャランの年齢を考えて父が決断したと言つ次第です

「かわいそう」「…」

クラスがそう言つて押し黙る。

「やう言つてくれて、ありがとうございます。僕としても、悲しい経験しか知らないシャランには本当に幸せになつて欲しいから、彼女が心から愛せる人と結婚して欲しいと思います。

それに、彼女は僕の事を兄のように慕つてくれてはいますが、夫になるなんて夢にも思つていないですしね。僕もシャランの事は妹以外には思えませんし、僕だって、本当に愛する人と一緒になりたいと思つてるので、父の意見には従いたくは無いんです。」

毅然とした態度で王子が言つた。

「ベイル様のお気持ちは、王には伝えられたのですか？」
おばーさまが真つすぐに王子を見ながらいつた。

「はい……。しかし、父は聞く耳を持つてはくれませんでした。王宮でのシャランの立場は、とても危ういんです。彼女の安全を考へると、僕としても受け入れざらねばならなかつたんです。でも、シャランの食事への欲求からお披露日の前にいなくなつてしまつて、王宮では、大探しをしていた所でした。

そんな時に、サルン伯爵から幼い迷子を保護したという連絡を受け、僕が見に行つたという訳です。」

「じゃあ、貴方は、シャランちゃんを連れて帰つてお披露日をせるの？」

堪らなくなつて、私が聞いた。

「シャランの立場を考えるとやつぜなるを得ないよ、ラルー」

悲しい顔で王子が言った。

「事の次第は、わかりました。

ねえ、あなた、シャランちゃんをウチで引き取る訳にはいかないかしら？あの子はあまりにも悲しい事しか知らないわ。孫達と一緒にサルン家で大切に楽しくに育てれば、成長も見込めると思うの。その間にシャランちゃんが好きな人が見つかれば、御の字じゃない。それがベイル様ならなおの事、いいお話でしょ？ベイル様には時折、ウチにいらしていただいければ好きになる可能性も高いわ！

このまま、王家にいてもシャランちゃんが成長できるとは、到底思えないの。お願いあなた。」

おばーさまがおじーさまを見つめる。

「お父様、私からもお願ひ。私の娘だと思って育てるから…もちろん、分け隔ては絶対にしないわ。」母様もおじーさまにお願いする。

「僕達も、兄妹と思つて接するから…ね、ラルー！」

「うん、おじーさま！お願い！」

クラスと私がおじーさまを見つめる。

「お前達、犬や猫の子供を引き取るのは、訳が違うんだぞ！」

.....。

はあ……。わかった。私から王に話してみよう。」

おじーさまがうなだれながら微笑むと、王子の嬉しいそうに手をきらめいた。

“王宮の接見の間”

王、王妃、王子、サルン伯爵が接見の間に入つてから、かれこれ1時間程シャランについて話し合つてゐる。

「……ふむ、話はわかつた。

しかし……サルン伯爵には悪いがその……そなたの孫は、ハーフエルフだとミスティーケ公爵から聞いている。

もちろん、サルン家はパチーノにおいて代々王家に忠義を持つて働き、功績をあげてゐる事は、十分承知をしているが、意地汚い人間の血が入つたハーフエルフとシャランを共に生活させるのは、どうかと思うが……。」

「父上……」

ハーフエルフを蔑む王の言葉に思わず、王子が声を上げる。

ギキッッッ！

大きなな音に王と王子が振り返ると、サルン伯爵の立つてゐる床がひび割れていた。

「「や……、サルン伯爵？」」

「失礼致しました。私とした事が今修復を致します故……」

無表情でサルン伯爵が手を翳すと一瞬で床が元通りに戻った。

サルン伯爵の表情からは、全くわからないが静に怒っているのがドス黒いオーラで十分にわかり、一同押し黙る。

「　　」

いつも、感情があるのか？と思う程、冷静沈着なサルン伯爵が、一瞬ではあるが、感情を暴走させてしまうとは…。凄いジジ馬鹿ぶりだな！！

思わず、マジマジとサルン伯爵を見てしまつ。

「王孫どうかされましたか？」

「いえ…。何も…」

サルン伯爵は、「ホント一つ咳をすると王を見つめて言つた。

「王が心配なさるお気持ちはよくわかります。私も孫達に会つまでは、ハーフエルフに対して同じ気持ちを抱いておりました。

しかし、我が孫達は、祖父の私から見ても素直な子達ばかりです。今日も一人ぼっちのシャラン殿を見て心配し、保護したのは孫達なのです。

孫達を見ていると、毎日の生活で兄妹達同士刺激をしあい成長をしています。

兄妹達の中で負けたくない、追いつきたいという気持ちから、昨日できなかつた事が今日できるようになります。次の日はもっと多くの事ができるようになつて、大人の私達が日々驚かせられています。

恐れながら、JUJU宮ではうちの孫のよつな子供はおりません。孫達と一緒に生活する事は、シャラン殿への良い刺激に必ずなるかと思ひます。」

「うーむ…しかし……」

「私は、サルン伯爵に賛同致します。」

王妃がニシコリ微笑みながら発言した。

「サルン伯爵は、実直な方ですね。その方の自慢のお孫さん達と一緒に育つ事は、あの子にとつても必ずプラスに働くはずです。王宮にいても、私達は公務が忙しくあの子にはそんなにかまつてあげることは出来ないわ。少しでも可能性があるのであれば、私はそれに賭けてみたいです。ね？あなた。」

王妃は、少女のよつにたおやかに微笑みながら首を傾げて王を見る。

母上のお願いポーズが出た！これは十中八九決まる！

「…………う、…………ううう」

はあー。仕方ない…サルン伯爵、シャランを受け入れてくれるか？

「はい。喜んでお受けいたします。しかし王、前もつて申し上げておきますが、私や、妻や娘は、シャラン殿を特別扱いは致しません。自分の家族と思つて接しますので、叱らなければいけない時は孫達と同じよつに叱つますので、その点は、了承願います。」

「わかった。しかし、シャランが新しい生活の中でベイルの事を忘れる事が無いように月に一度ベイルがサルン家を訪れる事としよう。

「あいがとうござります。父上。」

「また、シャランがサルン家にいる期間は、ベイルが成人するまで
とする。」

「わかりました。ありがとうございます。では、家族達に話してま
いります。」

サルン伯爵は、膝を付き頭をさげると接見の間を静に後にした。

＝その晩＝

「シャラン、クラス兄様と母様の隣がいい！」

シャランは目を輝かせてクラスと母様の隣の布団に潜り込んだ。

「シャラン、ずるい。私だつてそこがよかつたわ。今日だけよ！」
ラインがクスクス笑いながらシャランをからかう。

「えへへ！ あいがとう。明日はライン姉様とラルー姉様の間で寝た
いな！」

「あら、フィーダでなく、私を選んでくれてあいがとう！」

「ちえ！ 明後日は俺の隣な？ シャラン。」

「うん！」

ニッコリ笑顔のシャランが元気よく頷く。

おじーさまが王様達とのお話が終わって、シャランを引き取る事になつたと私達に告げた。

そして、今日からシャランは、私達の兄妹だと黙つて接しないと伝えた。そして、シャランには今日から家族になつたのだから、おじちゃんではなくおじーさまと呼びなさいと話した。

「おじーさま？」

キョトンとした顔でシャランが言つた。

「やつだ。今日から私はシャランのおじーさまだよ」

そつまつとおじーさまは、ニッコリ笑つてシャランの頭を撫でた。

「私は、シャランのおばーさまですよ。よろしくね」

「おばーさま？」

おばーさまが笑顔でシャランを抱きしめる。

「そして、私が母様よー」

母様がシャランを抱き上げてクルクル回ると最初はびくつ顔のシャランが母様に抱き着きつれしそうに笑い声をあげる。

「シャランは、ワインより小さいかりワインの妹だなー。ワイン妹ができるよかつたなー。シャラン、カルはお前の弟だから、面倒みてあげなよ」

フィーダが母様からシャランを受け取ると高こ高いをした。

「うんー。シャラン、カルの面倒みるー。」

「シャランは偉いね。カル、シャラン姉様だよ

「ちやらんねたま?」

カルが首を傾げながら言った。

こうして私達は9人家族となつた。

「シャラン、嬉しいのはわかるけど、今は寝る時間よーー皆も早く布団に入る!」

母様が優しくシャランを諭すとシャランの背中をゆっくりポンポンと叩く。同じベッドで寝ている私達にも優しいその振動が伝わりいつしか皆、寝息をたてていた。

「シャーラン、お口に食べ物が入ってる間に違つ物を口に入れては、ダメよ。ポロポロ、口から出しあうでしょ？ ゆっくり噛んで飲み込んでから、次の食べ物をたべるのよ」

「モッモ、モーパモーモー！」

「口に食べ物が入ってる時にはしゃべらないのー。」ぐくんしてから喋つてね。」

シャーランが来てから、大人しかったラインは、すっかり成りを潜めお姉さんぶりを發揮している。その姿を周りがおかしそうに微笑みながら見てるのをラインは気づかない。

まぐまぐ…。」ぐくん！ 「だつて無くなつちやうかも知れないもん。」

「誰もシャーランの食べ物を取らないから安心してゆっくり食べなさい」

母様がシャーランの顔についた食べ物を指で取つて、自らの口に運んでパクッと食べながら言ひや。

シャーランがウチに来てから2週間が経つた。すっかりウチにも馴染んで、今じゃフィーダに並ぶ暴れん坊ぶり。

だけど、時々夢で昔の怖かつた思い出が蘇つてくるのか、泣きながら「ごめんなさい、ごめんなさい」と、うわごとのように繰り返す事があるて、その度、母様が、シャーランを胸に抱き、「大丈夫。母様がここにいるからね」と言ひながら、ゆっくりシャーランを揺らす

と再び安心したようにスースと寝る。

「あつとシャランはね、昔の自分と必死に戦つてるとゆづの。もし、母様が仕事で遅くなつてシャランが泣いてる時に間に合わなかつたら、あんた達しつかり面倒みてあげてね！」

母様から上、三人にお願いされたけど、私とクラスは言われなくてもやりますよ。

フィーダは、寝ちゃつて起きないけどね…

「クラス達は今日は何をするの？」

おばーさまがお茶を飲みながら尋ねた。

「僕らは、剣の稽古です。そうだ、おばーさまからも書つて下さい！ラルーも剣の稽古をするつて言い出したんですね。女の子には、危険でしょ？何かあっても僕とフィーダが守るつて言つてるのに聞く耳持たなくて…」

「だつて、クラスやフィーダがいない時に危険な目にあつたりびつするのよ！ましてや、ラインやシャランやカルだけしかいなかつたら私が守るしかないでしょ？」

「フフッ。クラスは貴方の事を心配して言つてるのよ、ラルー。でも、ラルーの言つ事も一理あるわね。守られてばかりではいざつて時には何も出来ないもの」

おばーさまが「ヒヒヒ笑つていつ。

「ウホン、ラルー…剣を知るのは良いが、危ない事は程々にしてお

きなさい。」

おじーさまが真面目な顔で言つ。

「はあーい。でも少しだけならいいでしょ？おじーさま？」

「ま、まあ少しだけならな…」

「父様つたら、ラルーとカルには甘いんだから…」
母様がおじーさまをからかう。

「ねえラルー姉様、シャランも剣のお稽古してみたいー！ライン姉様
も一緒にしょー！」

「えつー！剣の稽古？…私、怖いわ…」

珍しく昔の氣弱なラインが顔を出す。ラインは、本当に怖いみたい
で顔が引き攣つっている。うーん、根っからの女の子でかわいいわ！
ライン。

でも、ラインの姉様としての威厳も立たせてあげたいし…

「シャランがもう少し大きくなつたら一緒に剣の稽古しようね」

「わかった…シャラン早く大きくなるー！」

「ー」

大人三人が顔を見合わせる。

こんなにも早くシャランの成長を望む言葉を聞けるとは…。

「やはり、子供は、子供の中にいるのが成長の一番の近道なんだろ
うな…」

「ええ、本当に…」

「おじーさま、おばーさま、何のお話?」

不思議な顔でシャランが聞く。

「いえいえ、何でもないのよ。ほら、シャランもつと食べなさいね。」

おばーさまがシャランのお皿にサラダを乗せるといシャランは嬉しそうな平らげていった。

それから、年長の私達は剣の稽古に、ラインとシャランは歴史のお勉強、カルは積木とそれぞれの課題を行つた。

「ラルー様、筋がいいですね。次は上段からの突きを100回素振りをしましょう」

華奢な体つきの家庭教師トラック先生が微笑みながら言つ。

マジックすか!結構フラフラなんですが!?

この先生は、教え子の限界+までの練習をさせるので教え子は皆上達が早いと評判の先生だけど……キツイわー。

ちょっと筋が良いと褒められた事にいい気になつてました。ごめんなさい…

「せ、先生……、ちょっと休憩をしませんか?」

休みたいと思ってた所にバテバテのフィーダがタイミングよく提案してくれた!

ラツキー！

「それじゃ、各自に与えられた課題が終わったら休憩して、その後手合わせしてみようつか？」

トラツク先生が微笑みながら言ひ。

先生の鬼ーー！！！

皆の心の声が聞こえた気がする…。

やつと課題が終わつたー。ああ疲れたよ。つーか口聞けないくらい体力消耗した。

フラフラと木陰を田指して我々三人がよたつきながら歩き、ドサつと腰を下ろす。

フィーダなんか俯せでお尻だけ上げた間抜けな格好だから、同じく疲れきつているクラスと私は、は突つ込む事さえできない。

「ププーー三つ子ちゃん達トラツクに相当やられたねー！大丈夫かい？」
と、後ろから笑い声が聞こえた。

私達は顔だけあげて声の方を見るとそこにはベイル王子がクスクス笑いながら立つていた。

「　「　「ベイル王子ーー?」

「さすが三つ子だね。息ピッタリだ！」

私達は、慌てて膝をつぐ。

「あ、そうゆうの王宮で無いところでは、やめてよー王子って呼ぶのも、ベイル様って呼ぶのも禁止ね！」

笑顔で王子がいう。

「え…、じゃあ何て呼べばいいんですか?」

「ベイルでいいよ。それに敬語も王宮以外では禁止ね！シャランに対して兄弟みたいに接してくれてるなら、僕とは友達として接してくれないかな？」

ベイルが上目遣いで聞く。

「でも…」

「ダメかな…」

とても悲しい顔で王子がうなだれ捨てられた子犬のような目で私達を見る。

ズキューーン

なに、この罪悪感は？

やめて、そんな目で見ないでー！クラスとフィーダの顔見ると同じく罪悪感に苛まれている顔をしている。三人で顔を見合せコクリ

と頷いた。

「わかりました…いや、わかつたよ、ベイル

私がこいつ言つとベイルは満面の笑顔になつて私を抱きしめた。

「ありがとうラルー…」

「つきや…」

ち、近い…近いつづーの…

「ほん、ベイル！ラルーから離れて…ラルーが困つてゐるから」
クラスが間に入つてベイルを止めてくれた。

「え？ああ、めんね。嬉しくてつい…／＼／＼

「それより、なんでウチにいるの？」

「月に一度シャランの様子を見に行くつて父上と約束してゐるんだ。
あれ？サルン伯爵から聞いてない？」

さつきシャランの様子を見たけど、文字を書くのに必死で僕の事なんて眼中になさうだつたから、読み書きが終わるまで君達の剣の稽古でも見てきたらつて君達のお祖母様に言つられてね。」

「そうだつたんだ。」

クラスが思わず言つた。

「ねえ、僕もしばらく剣を握つてなかつたから一緒に稽古していい
かな？」

「え！ ベイルが？ だつてベイル相手に怪我させたら、王様黙つてないよ！」

「大丈夫だつてフィーダー！ 君らより剣を扱い慣れてるから、昨日、今日始めたヤツには負けないよ！」

カラカラと笑うベイルに対し私達の鬭争心に火が付いたのは言うまでもない。

やつてやろーぢゃない！

カン、カンカーン！ 木刀が打ち合つ甲高い音が響き渡る。

私が上段から振り下ろした木刀をベイルが片手で振り払う。返す刀で足を振り払おうとした下段から木刀を振り上げるとベイルがヒラリとジャンプをし、ギリギリの所でかわす。

「ハアハア、ラルー！ やるね！」

「ゼーゼーゼー、そ、そっちこそ…」

ベイルは、最初にクラスと、次にフィーダと手合させして、ことごとく打ち負かせているが、流石に三人目となると、息があがつている。が、散々打ち込まれ続けている私の方がフラフラだ…

しかーし、絶対に負けない！

木刀の切つ先を地面にあてながら、振り上げて土をベイルに浴びせた。不意を疲れたベイルの目に土が入り、怯んだ拍子に上段から

木刀を振り下ろす。

もうひつた！

そう思つた瞬間にベイルが私の目の前に移動し、私の木刀を片手で掴み、もう片方の手の中にある木刀を私の首に宛てた。

「引っ掛けた！ 本当は、土は田に入らなかつたんだ」

「騙したのね？ 汚いわよ」

「ラルーだつて汚い手を使つたからお互い様だよ！」

ベイルは、肩をすぼめて笑いながら答えた。

「次、僕と手合させして！」

「クラスずるい、次俺としてよベイル！」

「ハハハ！ 君達は、本当に負けず嫌いだね。それじゃ順番ね。ラルーの前にフィーダとやつたから、今度は一回まわつてクラスとね！」

「貴方達、ベイル様が疲れてしましますよ。今日はこれまでね。トラック先生、ありがとうございます。ベイル様シャランのお勉強が終わりましたので、皆でお昼にしましょう。」

いつからそこにいたのかわからないが、おばーちゃんの鶴の一聲で私達は、昼食を食べに食堂へ行つた。

「ベイル！ なんでウチにいるの？」

嬉しそうなシャランがベイルに飛びつく。

「ウチか…。そうか、そうだね。シャラン、大切にしてもらってるんだね」

優しい顔でベイルがシャランの頭を撫でる。

「うん！シャラン家族ができたのよ」

「そつかあ、よかつたね」

「うん！一緒に飯食べよ」

ウチの昼食は、ある意味戦争だ！

「クラス！サラダのお皿取つて」

「カル！パン食べなさい」

「いやあなの」

「おかわり！」

「フィーダ兄様、取らないで！」

「お口が動いてないよ、ライン」

「お父様、やつきの件なんだけど…」

「あらあら、ラルー！豆だけ避けて！美容に良いから食べなさいね」

「シャーランー、口からまた」」飯」が飛んでるわよ」

「お前達、そんなに急いで食べるの消化に悪い…やつべつ30回せ
噛みなさい」

「「「「「はあーー」「」「」「」「」」

ウチのせわしない昼食風景を田の当たりにしたベイルは、始めはび
っくりしていたが、すぐにクスクス笑つて言った。

「」」の家は、楽しくて居心地がいいですね。シャーランが馴染むのも
よくわかつます。」

「あらー、うるさかったですか？すみませんね…」

苦笑しながらおばーさまが言った。

「いえ。我が家は」」飯を食べるのも何をするのも一人の事が多いの
で、」」うして家族が集まつて食事をする事がこんなに樂しいとは思
いませんでした」

「…」」んな食事でよければこつでもこらしてトれこ。」

「やうだよー、こつでも来てまた、手合わせじよつよー。」

「サルン伯爵、フイーダありがと」」」ぞこます。是非伺わせていた
だきまや」

心底嬉しそうにベイユは言つと、ゆつべつスープを飲んだ。

それから、ちょくちょくとベイルがうちを尋ねてくるようになった。シャランに会いに来ると言つよつは、私達兄妹と遊ぶのが主な目的で。

特に皆がハマつたのは、ベイルが教えてくれたチエスだった。意外とフィーダが一番強くベイルとフィーダの攻防は三日間続く程、白熱した戦いだったので最後はお互いにボロボロになつて、なんとかフィーダが勝ち「い、イエーイ…」と一聲あげてその場で白田になつて寝てしまった。

こつして、私達は新たな家族と友達と共にスクスクと成長していくた。

その24（前書き）

ここから新章に入ります！ラルーも大人になりました。

「ラルーちゃん、おはよー！」

今日は、頭痛の薬を貰えるかしあ？」

「あら、ジャンヌさん。おたお祖母さんが？」

「季節の変わり田だとどうしてもね…ラルーちゃんのはよく効くからねー。」

「いつもありがとうございます。冬も近いので、ミントで作った喉飴も入れておきました。」

「あら、ありがとうございます！これ喉がスッキリして私大好きなの。いつも悪いわね。はい、お金！

あ、そうだ！今度ケーキ作つたら持つてくるね

「ありがとうございます。楽しみにしますね！」

カラントランとドアに付けたベルが鳴りお客様が帰つて行つた。

さて、次のお客様が来るまでパツとお皿でも食べちゃおうかな！
お茶を入れて、朝作つたサンドイッチを広げて一口食べる。パリつ
としたレタスとハムのジューシーな味わいがなんとも言えない！

「んまい！」
店の裏で一人、モグモグとサンドイッチを食べているとカラントランとお客様が来たことを告げるベルがなつた。

「ホアービ！ フグ、ヒキマフ」

口の中の食べ物をお茶と共に飲み下して店に出る。

「お待たせしました！ 今日はびつた！」用件……ってフイーダ！？ なんでここにいるの？」

「なんだって、5年ぶりに会つたつていうのに冷たい姉貴だな、ラルー！ 今日行くつて鼻に手紙付けて出しておいたけど見てないの？」

「見てないわー！ せ、フイーダに似て道草してるんじゃないの（笑）」

私はそう言つと久しぶりに会つフイーダにギュッとハグをした。
「久しぶりのラルーの匂いだ…」
フイーダも私の肩に顔を埋める。「お前、男できないよな？」

「はあ？ 何言つてんの？ バッカじゃない？」

「その分だと出来てないんだなー！ よしよしー！」

カラソ、カラソと再びドアが開きベルがなった。

「ラルーちゃん、ステフが切り傷をしちやつて！ 消毒薬と塗り薬をつて、あら？ あらり？ いやだわ、私ったら間が悪かつたわね、出直すわ… //」

「えー！ あつスミスさん！ 違うんです。弟なんですよ、これは」

「え？ 弟さん？ あら、やだ、てっきりラルーちゃんのいい人だと思

つちやつたわ！あら、弟さんいい男ね！私があと20年若ければ言
い寄つてたわよ！

「何をおっしゃこますか、マダム。今も充分お綺麗ですよ

フイーダのマダムキラースマイルがスミスさんに炸裂し、舞い上が
つたスミスさんは、消毒薬と切り傷の塗り薬の他に風邪薬と腹痛の
薬を買つてくれた。

「あんたね…その偽紳士面するのやめなさいよ。」

「これで、ラルーの店の薬が少しでも売れるんだから恩に着ろよ

「うの店は細々とだけど、ちやんと売れてるんだから大丈夫です
」

「でも、まさかラルーが人間の町で薬屋やるなんてな…未だに信じ
られないよ」

フイーダがまじまじと私を見つめながら遠い目をして言つ。

サルン家に私達が転がり込んだでから今年でちょうど50年になる。

おじーさま、おばーさま、母様に愛情たっぷりに育ててもらい興味
のある事は、なんでもやらせてくれた。その中で私の心を鷲掴みに
して離さなかつたのが薬だつた。

いやいや、違いますよ！やばい薬とかではありません。

薬草や魔法を使ってできる病気治療の為の薬です！

何と何を配合するなどどんな症状に効くとか考えるだけでたまりません！

薬学に没頭した私は、パチーノの中の薬学の本を読みあさり、薬学の先生の弟子になり薬剤師になつた。

おじーさまが薬学に没頭した私の為に薬屋を町に作ってくれて晴れて薬剤師としてデビューしたが、これまたハーフエルフと言う事で私の作る薬は、一向に買ってくれるエルフはいなかつた。

そんな時、人間の町に今まで考えられないような薬の配合で多くの人を助けているセドリック先生という人がいるという噂を聞きどつしても会つて教えを請いたくてなんとかおじーさまと母様を説得し、1年だけ人間の町に行ける事になつた。

セドリック先生は70過ぎのおじいちゃんで、初めは私の姿と生い立ちに驚いたが、熱心に薬学の素晴らしさを語る私に根負けをし、弟子にしてくれた。

セドリック先生は、おじいちゃんと思えぬ程、日々研究に熱心に取り組むと共に町の人々から薬屋として絶大な信頼を得ており、遠くの町から薬を求める人達も少なくなかつた。

しかし、先生の弟子になつてちょうど一年が経つた朝、いつものように先生を起こしにいくと先生は、安らかな寝顔で冷たくなつていた。

もともと身寄りが無かつた先生は、私に財産と薬屋を譲るのでどうか自分の意思を継いで多くの人を助けて欲しいと遺言書に書いていた。

そこから、おじーさまと母様とおばーさまを説得し、現在サルン家

を離れ薬屋として人間の町で暮らしています。

とにかく、町の人や遠方からくる人が困らないように常に店は開けているので、実家に中々帰れずに5年が経つていた。

「母様…私の事何て言つてる?」

おずおずとフライーダに聞くと、ニッコリ微笑み何も言わない。

怖い！すんげー怖いんですけどー無理、会つのは超怖い！

「ま、みんなラルーの事が心配なんだよ！年末くらい帰つて来て御達示が出て俺が連れに来たつてわけ」

「そう簡単には店を開けるわけにはいかないわよー病氣で困つてる人がいつ来るかわからないし…」

「せうこうと思つていいもの持つてきたんだーはいコレ」

そう言つてフライーダが小さな箱を取り出す。

「何よコレ？」

「この箱には、もう一つ同じ箱があつて、時空を繋ぐ魔法がかつてるから、この箱に紙で何が欲しいって書いておくともう一つの箱に繫がつて紙を取り出せるようになつてるんだ。その紙を見て薬を作つて箱の中に置いておけば、こいつの箱に薬を届けられるんだよ。凄いだろコレ！ベイルが作つたんだぜ。すんげー複雑な魔法がかかつてるらしくて3ヶ月くらい費やしたつて言つてた」

「ベイルが！？」

「あいつラルーの事となると昔から田の色変わるからな…。これ作

るのも、ろくに寝ないで作つたみたいで、出来上がつた瞬間に落ちてたもんな。」

「やめてよ、そういう言い方。ベイルには、シャランがいるでしょ！」

「あいつ、シャランの事は妹としか見てないぜー！下、王様とその事で言い争いが絶えないみたいだし…」

ドキンと胸が高鳴つた。いつからだろ？…ベイルの存在が特別になつたのは。ベイルとシャランは、将来が約束されているのは周知の事実なのに、気がつくとベイルの事を目で追つている自分に嫌気がさした。

シャランは、うちに来てから少しづつだが成長をし、ベイルが成人した時には調度、見た目が10才くらいになつていて。シャランの成長に驚き喜んだ王様がもう少し、彼女の成長を待つてから王宮に来させる事にし、まだサルン家で家族と共に生活をしている。それからしばらく会つてないが、今では美しいお嬢様になつている事だろ？。

私は、シャランがいつ王宮に呼び出されベイルと結婚をするのかを毎日ハラハラしながら過ごしていた。そんな生活が嫌になつていて時にセドリック先生の事を知り、少しでもベイルから離れられたいという気持ちもあって、人間の町に来た。

もちろん、薬学が好きで極めたいと思ったのも本当。多分、色々な意味でタイミングがよかつたんだろうな…
今では、この生活に大満足だ！

「んじゃ、ラルーー！わざと支度して帰るわ」

「ええ、今から…無理よ…今やつてる研究を止めるのも、すぐこは無理だし、箱の事だつて町の人と言つておかなきやー…あと、帰つたら、箱の前で注目が来る事を待つ暇なんて無いだらつから、必要な薬を作り置きしておかないと…」

「ブハッハハ！ラルーは昔つから、真面目だな。やつと思ひつけたよ。だから俺が来たんだつて。ホラ店番じことやるから、お前はやらなきやならない事をやつて来いよ…」

ニヤニヤ顔のフィーダが私を面白がつて見下ろす。

テーマ調子に乗りやがつて…

田にもの見せてやる。

それから、フィーダでも扱えられる作り置きの薬の説明をした。

「それじゃ店番よろしくね、フィーダ！大好きよ」

そう言つて、フィーダに抱き着く。ただし全体重はフィーダの片足の上。

「イイツツツタアー」

「じゃあ姉様は、やらなきやならない事をやるために、店の裏に引っ込むけどなんかあつたら言いなさいね」

悶え苦しむフィーダを後にして、店の裏の研究所に引っ込んだ。よしぃや！報復成功！

＝6時間後＝

「あー疲れた！ラルータ食にじよーよ」

「わかつた！もつちよつと待つててーあ、ドアのノブに本田閉店の看板かけといて！」

「へイへイ…人使いの荒さはオフクロ譲りだな、全く。」

フィーダが渋タドアノブに看板をかける。まあ、閉店と書いていても急患の場合は、ドアベルを鳴らしてもいつまでも看板の下に書いてあるけどね。

私は、研究を一旦ストップするための作業を終えて、大食いのフィーダの為に夕食を作つている。

「出来たから、いっち来て」

「はあー腹減つた！おつ上手そつだなー！いただきまーす！んー…これめちゃくちゃ美味しいー！これは何？」

「それは、こここの惣物料理で♪コナツっていう麺料理よ

「へえーー！初めて食つたけど、スゲー美味しいよー。」

「んじゃ、これも食べて見てよー肉団子だよー。」

まぐまぐまぐ……「う、うつめえーー。」れクラス達にも作つてやつてよーすつげー喜ぶから

「あら本当？うれしいわー！これも食べてみて

フィーダの美味しそうな顔を見ると、久しぶりに自分以外の誰かと食事をしている事実に気がつく。

もともと、料理を作る事は大好きだったから、先生が生きてた時は、先生の為に「」飯を作り、一緒に食べていたけど、一人ぼっちになってからは、自分一人の為に料理を作る事が面倒で、朝は果物とコーヒーで軽く済ませ、昼は朝作ったサンドイッチを食べながら店番をし、夜は研究や薬作りに没頭して、食べない事が多かった。

だから、久しぶりの来客が嬉しくてテーブルいっぱいの料理を作ってしまったが、フィーダが片つ端から平らげていく。

「ラルー、お代わりある?」

「あるけど、あんたのお皿に山盛りに持つたから、少ししかないわよーちょっと待つてね」

お皿を持って席を立つと顔が綻んでいる自分に気が付く。

（「」して家族が集まつて食事をする事がこんなに楽しいとは思いませんでした）

ふと昔、ベイルが言つた言葉を思い出す。あの時は、よくわからなかつたけど、いまでは痛い程わかる。当時のベイルは、今の私よりも幼かったのに、もうそんな事を知つてしまつていたと思つと胸が締め付けられた。

「ラルーー!まだ?早くー」

ダイニングでフィーダから「」飯の催促の声が飛んで来る!

人が感傷的になつてゐる時にある男は……

「ちよつと待つてなさい食いしん坊！！すぐ行くわー！」

「なんだよー怒るなよー。ラルーも一緒に食べよー。」

甘い笑顔でフイーダが見つめて来る。
ムカついが、ついほだされてしまう。

「別に怒つてないわよーはー、お代わり。んじゃ、私も食べよつと
つてアンタ殆ど無いぢゃん！」

「あ、上手かつたからつい…、良ければコレ食べる？」

とさつき渡したお代わりのシチューをくれようとするが、それも1
／5くらいしか残つていない。

「こんの一食欲魔人め！せつかくデザート作ったけどフイーダには
あげない！」

「そんなん、ラルー姉様！優しい優しいラルー姉様お願いだから、
デザート取り上げないで」

上目遣いのキラキラ眼差しで見つめられると無視できない。

仕方なく作ったケーキを出して お茶をいれている間にフイーダが
ワンホールの7／8程、食べていた。
勿論、ボコボコにしてやつたのは言つまでもない。

もう夜も遅いので、今日はついでに泊まって明日サルン家に帰る事にした。

「ベッド一つしかないから、フイーダが床で寝てよ」

「ええー? ラルーのお師匠のベッドがあつただろ?」

「先生の物は思い出すと悲しくなるから、必要なもの以外は全部、教会に寄附したの」

「マジでか…。本当にそつゆう所はオフクロそつくりだなーんじゃ、今日は、久しぶりに姉弟仲良く一つのベッドで寝るか!」

「あんた、本気で言つてるの? シングルベッドに大人な二人なんて無理よ! しかも、お互い、いい大人なのよ。ダメ!」

「詰めれば大丈夫だつて!」

そつ言つて、フイーダが無理矢理ベッドに入つてくる。

「あんたはレディのベッドに潜りこんで! クラスが見たら殺されるわよ」

「きつと、ベイルにもね!」

しかし、ここにはクラスもベイルもいないから俺はゆつくり柔らかいベッドで寝れるんだな! つか、狭いな。もうちょっと詰めれないと?

「落ちるつーのー!あんた、やつぱり床で寝なさこよ

「ショーがねーな、んじゃいづすれば文句ないよな?」

「ぐいっとフィーダが私を抱き寄せて腕枕をして反対の手は私の腰を抱いた。

「ちよつとフィーダ!近い、近いわよー」

「何いまさら照れてるの?昔はよく抱き合って寝たぢやん!誰かと一緒に寝るって安心しない?暖かいしさ」

「昔は子供だったのよ、今は大人でしょ!しかも、いい年した姉弟が抱き合って眠るってありえないから!…とゆー事で、フィーダ離しながら!…フィーダ?」

フィーダを見るとスウスウと寝息を立てていた。

目を閉じて3秒で寝るとほ、お前はの 太か!?

しかも、なんかこいつ…慣れてる?腕枕するのも凄い慣れた手つきだったよね…

人には男作らないよつひつておこで自分は遊び歩くとは、いい度胸じやねえーか…

すやすや寝ているフィーダの鼻の穴に指を突っ込みでやつた。すると「フハー、フハー、」と激しくブサイクな顔で口から呼吸を始めた。

「ふつつ!バカ面!」

フィーダのバカ面ですつかり戦意を無くしてしまい、仕方なくあきらめて、フィーダの顔を観察した。

昔の可愛かつた顔は、今ではおじーさまに似た精悍な顔となつていたが父様譲りの垂れ目な所は昔から変わらないが、そこがチャーミングだと女子達からは絶大な人気を得ていた。

クラスも成長と共に母様に似た美形になり、サルン家のクラスとフィーダと言えば誰もが「あの美形のハーフエルフ兄弟ね」とわかる程、若い娘さんから人気を博していた。

一方の私は地味な顔から一転して美しくなった！

つと… いう事もなく、未だ地味な顔立ちだが、赤毛が益々濃くなり、今では深紅の色になつてしまい、非常に目立つ。

一度、薬品で金髪にできないか、試してみたが、どんな強い薬を持つとしても深紅の髪色は変わらなかつた為、今は髪を顎のラインで切りボブヘアにして少しでも目立たない努力はしている。

しかも、瞳の色は、両目とも紫だつたのに、まだパチーノにいた頃、魔法をつかつてアレルギーに効く目薬の開発をしていて、動物実験が嫌だつた私は、自分の体で実験を試みていた。

その時、作った目薬を点眼してみたら、片目が青紫へと変わつてしまつた。

なんとか元の色に戻せないか色々と試してみたが、一向に戻る気配がなかつた。

セドリック先生の弟子になつた後は、先生と二人で研究の間に元の色に戻す方法を模索した。

ある日、昔の文献を調べていると魔法を使いその影響が副作用として術者に跳ね返った場合、その魔法の副作用は一生モノで消えないところ驚くべき事情を知った。

「マジっすか……いや、本当にマジっすか……
誰かウソって言つてえええ！」

三日三晩、私は泣いた。しかし、泣いた所で状況は全く変わらない。誰のせいでもなく、自分自身が行つた結果なので、仕方なく自分の容姿を受け入れ今に至る。

思えば、子供の時に大人になつたら赤毛から茶色の髪になるかも！とか、いつか美人になりたいと思って夢を抱いていたが、体が成長してみると、子供の時に願つた事は気持ちいいくらいに叶えられなかつた。

こんなにも叶わないのは、返つて清々しい程。

でも、容姿への願望とは反対に薬学に興味を持つてから、家族の理解を受けてやりたい事に没頭し、憧れの先生の弟子になれて、その技術と意思を継ぎ、薬を媒体にして人から必要とされる存在になり、仕事に対しやりたいと思つた事は、叶えられている。

悪い事もあつたが、今のところ、これまでの私の人生に満足しているし、今の安定した生活が大好きだ。

そうして、毎日穏やかな気持ちで過ごしていたのに、正直な気持ち

今更、ベイルとシャランに会って心を乱されたくはない。

しかも向こうは、私がこんな気持ちを抱いているとは全く思っていない事も知っている。

それだけに逢いたくない気持ちが強くなってしまった。しかし、家族が私の事を心配しているのも知っている。

揺れ動く気持ちは、どうすればいいのかわからず悶々と時間だけが過ぎていった。

短めです

「ラルー起きて！朝だよ

コサコサと優しく揺り起こされた。

色々と考えて寝たのが遅かつたからもう少し寝たいが何度も名前を呼ばれようやくが目を覚ますと、目の前にクラスの顔があった。

「えーーー！クラスビうじて此処にいるの？」

「フィーダがラルーを迎えたのに夜になつても帰つて来ないから心配してたんだよ。あいつ、またどこかほつつき歩いてるかと思つて、こつちに来てみたら、フィーダとラルーが一緒のベッドに寝てたから思わず、魔法でフィーダを突き飛ばしたといった（笑）」

「えー！ そうなの。全くわからなかつた！」

「ラルーの眠りを妨げないようちちゃんとラルーには防音防振の結界を作つてから吹き飛ばしたから気がつかないよ」

そう言って綺麗な顔に不適な笑いを浮かべる。相変わらず激しく妹巔鳳な兄だわ…

「それじゃ、今フィーダは？」

「罰として薪割りさせて、それが終わつたら隣のスマスさんに例の箱とラルーが作り置きした薬を預かって貰いに行かせた。ラルーは早く着替えておいで。下で朝食作つておくから

「えー、クラスがご飯作ってくれるの？」

「これでも、こっち（人間の町）にいた時は、家事全般は僕の仕事だつたからね！でも、腕を振るうのは久しぶりだから期待しないでよ」

私の頭を優しく撫でながらクラスが部屋から出て行った。

「フイーダーがつづくなよ。もう少し、静かに食べれないのか？」

「朝から薪割りさせられたんだぜ？腹減つて死にそつなんだから、大目に見ろよ！」

「あんたが無理矢理、私のベッドに入つて来たから悪いんでしょー。」

「何だよ、一人して！かわいい弟にもつと優しくしてよ」

「「可愛くないからー。」」

「声揃えて言つなよー凹むだろ…って事でお代わりー。」

「お前は、全く懲りないヤツだな…スミスさんにはちゃんと話したのか？」

「ああ、俺の笑顔で快くOKしてくれたよー。」

「あんたは、本当にそつゆう所は、父様譲りよね。ジゴロになれるわよ」

「處世術に長けてゐつて言つてよ」

久しぶりに、三人揃つた食事は会つていなかつた時間を直ぐに消し去り、昔からそこにいたような屈託のない笑いに包まれて幸せを感じた。

その後、後片付けをし作り置きをした薬をスミスさんに預け三人で家を出ると、薬草を栽培している畑に一頭のペガサスがいた。

「なに…これ？」

「ああ、いっちに来るときにおじーさまがこれに乗つて帰れば早いからつて言われて乗つて来たんだ。」

「俺の時には何にも言われなかつたぞ」

「田の行いの成せる技だ。」

「チョッ！あの、狸じいめ」

おじーさま、フイーダにペガサスを托さないのは正確です。

そうしつ、一頭は荷物とフイーダが、もう一頭は、クラスと私が乗ると、ふわっと宙に浮き勢いよく空を駆けはじめた。

「怖い！地面がミニチュアくらい小さくなつてゐ落ちたら死んじゃつ……」

ギュッとクラスに抱き着きながら田をつむり早くサルン家に着く事を願つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5121x/>

ハーフエルフの憂鬱

2011年11月9日21時01分発行